

そうして私と彼の高校生活は…

桜チップス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

総武高校に入学した私、夕舞優希《ゆうまいゆうき》は毎日をどこかつまらなく感じていた。

そんなとき、入学して2ヶ月経った頃に眼の淀んだ男の子が私のクラスメイトになった。その日から私の日常は大きく変化してゆく：

1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
82	75	69	61	55	49	40	34	28	23	18	10	4	1

目
次

私は昔からよく人に合わせて行動していた。

友人といるときはあまり自分の話はせず、相槌をうつだけだったり、大して面白くもない内容に周りが笑っているものだから、無理に笑ってみせたりした。

だからといって、別に友人といることが楽しくないわけではない。楽しいと感じる会話は普通に笑ったりもするし、休日は誘われれば遊びに行ったりもする。

ただ、あまり自分の事について話したいとも思わないし知ってほしいとも思わないだけ。質問されれば適当にはぐらかして終わりである。

そして私が一番苦手な会話。それは…ほら、今日も始まった。

「ねえねえ、こないだC組の斎藤くんがD組の美咲ちゃんに告つたみたいだよ!」

「マジで!?!? 斎藤くんカッコイイから結構狙ってる子多かったよねー」

「てか美咲ちゃんってかわいいけど性格悪いって有名なのにね」

「ちよつとシヨックー」

「で、で、どうだったの?」

「それがさー……」

…毎日毎日、よく飽きないものである。

中学の頃から徐々に増えてきた俗に言う恋バナ。

誰が誰に告白したかの、誰と誰が付き合ったかの、正直どうでもいい事ではないか。

自分が直接関わっている訳でもない恋愛事によくもまあ熱くなれるものだとも思う。

私は恋愛をした事が無いため、理解できずに冷めた目で見てしまっているのではないかと思つたが、友人が話している事を聞いていると正直ただ面倒くさいだけなのではないか、と高校生らしからぬ事を

ブーツと考えてみる。

「ねえ、優希ちゃんはどう思う?」

クラスメイトから突然の質問。

もちろん話を聞いてなかった私はついていく事ができない。

「えつとー…ごめん、ブーツとしてた。」

一応申し訳ないフリをして謝った。

「優希ちゃんってたまーにこんな感じになっちゃうことあるよねー」

「でもそういうところがちよつと天然ぽくてかわいいかも」

「しかも見た目が超キレイだからそのギャップの破壊力が半端ないし」

「さすがは入学してまだ2ヶ月なのに告白二桁越えの最強美少女!」

「いーなー、誰か紹介してよ」

などと口々に言っているが、実際のところただでさえ恋愛に興味がない私が入学してすでに何人も男子に告白されている。

男子は私のここが好きだあれが好きだの、適当に言っているとは思えない告白をぶつけてくるが、当然私はそれらを全てはねのけてきた。

なかには一度も会話したことのない人まで告白してきたときには、さすがに少し腹がたった。

更に中学の頃はこの手の話でイザコザがあったせいか、私は余計に恋愛事に無関心になっていった。

むしろ最近では嫌悪感すら抱くようになった。

私は彼女らの話に苦笑いで適当に誤魔化す。

「みんな席につけー」

担任の先生が教室に入ってきたため、なんとかこの話を打ち切る事ができた。

正直助かった…

先生は朝の連絡事項をみんなに伝えた後、一度教室のドアを横目で見て、こちらに向き直った。

「入学式の日に事故にあつて入院してた比企谷が退院し今日から学校に来れるようになった。分からないことが多々あると思うから、みん

なでサポートしてやってくれな」

先生の言葉に教室は瞬く間にざわめき出した。

そういえば、入学式の日から席が一つ空いていると思ってたけど、事故だったんだ。

全く知らなかった：

というか、多分聞いていたけど私が忘れただけだろう。

みんな知ってたみたいだし。

何気に私ひどいな：

「比企谷ー！入って自己紹介しろー！」

先生が廊下に声をかけると彼、比企谷と呼ばれた生徒は入ってきた。

それが私、夕舞優希と比企谷八幡との出会いであった。

先生に呼ばれて入ってきた彼、比企谷八幡は挙動不審で落ち着かない様子だった。

身長は、おそらく男性の平均はあるのに猫背なせいか、少し低く見える。

髪はちよつと長めで、てっぺんからアホ毛がひよつこりと生えてきており、何より特徴的なのはその眼だった。

まるで何か悪いものに取り憑かれたような、淀んだ眼をしていた。他の生徒達からも最初とは違った雰囲気のざわめきが聞こえてくる。

「うわーなんか暗そうなやつだなー」

「顔は…まあまあだね」

「でもあの目が…」

「ゾンビみたいじゃね？」

などと各々勝手な評価をつけ、女子は数人が目に見えて落胆している。

確かに見た目は暗い感じではあるが、自分で勝手につけた評価を他人に話すことに何の意味があるのだろうか。

まだ会話すらしていないのに、ほとんどの人が見た目だけで判断し、すでにこのクラスの中で彼がどういう人間なのか構成されつつある。

結局のところほとんどの人が外見で判断していることなのだろう。別に考え方は人それぞれではあるが、私はそれだけで人を判断するのは浅はかだと思うし、なんだか少し寂しい気持ちになる。

いつもの如くボーツと考え事にふけていると彼は教壇の前に立ち自己紹介を始めた。

「比企谷八幡です。よ、よろしくお願ひしましゅ」

あつ、噛んだ。

たしかに、初対面のクラスメイトの前でいきなり挨拶するのだから緊張するのも無理はない。

彼は緊張と羞恥にまみれた顔でコソコソと指定された席につく。その後、放課後になっても彼に話しかける人はいなかった。半月ほど経った日、この時期になるとある程度のグループが固まってくる。

大人しい人が集まるグループ。部活動で仲良くなったグループ。共通した趣味を持つグループ。

そして、見た目が派手で常にクラスの中心にいる明るい（正直少しうるさい）グループなど様々だ。

ちなみに私はというと微妙な立ち位置になってしまい、見た目が派手で：もううるさいグループでいいや。うるさいグループと大人しいグループの中間あたりにいる。

基本的には大人しいグループの子たちが、なぜか私の席の周辺に集まり談笑を始めるのだが、たちまちうるさいグループの子が私の席に集まると、大人しいグループの子たちは蜘蛛の子の様に散ってゆく。

最近はこんな感じのことが多くあり、早くもこのクラスでの力関係が現れてきている。

そして、両方のグループも共通して言えることが、ほとんどの割合で私の苦手分野である恋愛に関する会話をしたがることである。

「優希ちゃんはさー、やっぱ誰か狙ったりしてる人とかいたりするんでしょ？」

狙ってるって：私はスナイパーじゃない。

まあ言っていることは理解しているが。

「気になる人はいないかな。まだ入学してから3ヶ月程度だし。」

「でもさでもさ、やっぱある程度はどんな人間か分かるわけじゃん。ちよつとくらいいいなって思う人はいたりしないの？」

別にこの学校でそこまで深い話をしたこともないし、この短期間で人のことが分かるほど私は聡いほうではない。

「今は恋愛よりもこうやって友達と話してるほうが楽しいし、勉強も大変だから。」

たしか、彼女は前も同じ質問をしてきて全く同じ答えで返した記憶

がある。

分かってる。彼女たちは心配なのだ。自分の好きな男子が私の気になってる男子と同じなのではないかと。

この手の質問は中学のときから100回以上もされた。

そして、同じ答えを返しても彼女たちその場だけ安心し、何日か後にまた同じ質問を繰り返す。

勘弁してほしい。

ため息を吐きたい気持ちを堪えていると、ふと少し離れた席から男子の声が耳に入ってきた。

「うわ、ちよい比企谷見てみ。また本読みながらニヤついてるよ。」

「いつ見てもキモいよなーあいつ。」

「そりゃ誰も近寄らねーからボツチだわな。」

そういえば、彼だけは入学してどこのグループにも所属していない。

おそらく部活にも入っていない様子だし、そもそも誰かと会話をしている姿すら見たことない。

彼のほうから積極的に会話をすると、グループに入ろうとするところも見ることがないため、1人でいることが好きなのだろうか。

私も1人でいることは好きだが、さすがにこの学校という社会でずっと1人でいることは寂しいと感じるだろう。

だから苦手な恋愛話でも嫌な顔せず笑顔で会話するよう努めている。

彼は、1人でいることが平気なのだろうか…

休み時間の終了間際、クラスメイトが廊下から大声で私の名前を呼んできた。

「夕舞さーん！E組の伊藤君が呼んでるよー！」

…嫌な予感がする。

私は席を立ち、ゆっくりと廊下に足を進めると、そこには少し前に下校中話かけてきた男子が私を待ち構えていた。

確かバスケット部の人だっけ？周りの女子がキヤーキヤー騒いでいる

ので、それなりに有名な人なのだろう。

「夕舞さん、今日の昼休みにちよつと話あるんだけどいいかな？」

爽やかな笑みを浮かべて伊藤君が誘ってきたが、私は一瞬だけ断つてしまおうかと考えた。

しかし、中学のときの経験則で、ここで断つたら更に面倒くさいことになると思うので私は無表情で答えた。

「…うん、わかった。」

なんて可愛くない返事なんだろう。

だが、そんな私の無愛想な態度にも伊藤君は終始笑顔だ。

「ありがとう！じゃあ昼休みに迎えにくるから！」

そう言つて、キラキラした眩しい笑顔を振りまきながら去つていった。

ああ、嫌な予感しかない…

バックれてやろうかとアホなこと考えていると、案の定クラスメイトに拘束され尋問に近い質問責めが昼休みになるまで続いた。

そして無情にも昼休みはあつという間にきてしまった。

友人たちは興奮した様子で私の周りに集まってくる。

「ついに昼休みになつちやっただねー！」

「どうするの!? やっぱいつもみたいに断つちやうの!?？」

「ええーもつたいたい！伊藤君かつこよくて人気あるのに！」

「葉山君ほどじゃないけど爽やかで優しいし！」

爽やかではあるが伊藤君のこと全然知らないし…てか葉山ってだれ？

「いやいや、まだ告白して決まったわけではないし」

「いやいや、間違いなく告白でしょ！」

熱くなつたクラスメイトたちに囲まれてウンザリしているところで、今回の騒動の原因がおなじみの笑顔で迎えに来た。

「お待たせ、それじゃ行こっか」

周りから、頑張つてね！などと応援の言葉が投げかけられる。

思うところは多々あるが、とりあえず笑顔で行ってきます、と意味もなく言つてみた。

伊藤君の後をついて行くとそこはあまり人気のない場所でテニスコートが近くにある、海風の気持ちいい場所だった。

へー、こんな場所あったんだ。今度1人で来てみようかな。

そうひとりごちていると、近くのベンチにクラスメイトの男子が1人、昼食をとっていた。

あれは…比企谷君？

そっか。彼はいつもここで昼食をとってるんだ。

いいな…

私もゆつくりここでお昼を過ごしたいな。

なんて、これから起こるであろうことに対して思考を逃避させているところに、その起こるであろうことが唐突に始まってしまった。

「夕舞さん、気づいているとは思うけど、僕は君のことを初めて見たときから気になってたんだ。そして、この前の下校のときに勇気を出して声をかけて一緒に帰っているうちに好きになってしまった。」

ちよッ！

あなたの後ろに比企谷君がいるのに気づいてないの？

やっぱり聞こえているみたいだし。

しかも目が合っちゃった…

向こうもすぐく申し訳なさそうだ。

なんかごめんね…

「お願いします！僕と付き合ってください！」

「へっ？…えっ？…」

ヤバい、またボーツしてして途中から聞いてなかった…

この癖どうにかしないと。

その前に、まずは返事しないと！

一度、深く深呼吸して間をとった。

「…ごめんね。伊藤君とは付き合えない。というより、今は誰とも付き合う気はないんだ。」

「…そっか。じゃあこれからも友達として普通に話とかしてくれるかな？」

友達？いつの間にか？

そんな疑問が湧き出てきたが、無理やり飲み込んだ。

「うん。もちろんだよ。」

上手く笑顔で言えたかな？

伊藤君は落胆の表情をチラつかせながらも、去り際はいつもの眩しい笑顔に戻っていた。

「それじゃ、わざわざありがとね！これから友達としてよろしく！」

だからいつの間に友達に…

まあいいか。クラスも違うし、会うことはあまりないだろう。

あつ、そういえば比企谷君は？

さつきまでいたところに視線を戻すともうそこに彼の姿はなかった。

なんか強引に追い出したみたいで悪いことしたな…

つい先ほど始まったテニス部の自主練をしばらく眺めてから教室に戻った。

昼休みの一件が終わったあとに待っていたのは、やはりクラスメイトからの質問攻めだった。

「それで!?!?どうだったの!?!?」

「うん、告白だった。」

「やっぱりそうだよね!」

「それでそれで!?!?」

「うん、今は誰とも付き合う気はないって断ったよ。」

「ええー、もったいないなー」

「とりあえずでいいから付き合えばよかったのにー」

いやいや、食べ物ではないのだからもったいないも何もないのだが
…それに、

「やっぱ好きじゃないし気にもなっていないのに付き合ったりしたら不誠実だと思うし、好きになってくれた人と付き合ったほうが伊藤君も幸せになれると思うよ。」

「えー、夕舞さん堅いなー」

私は人を恋愛的な意味で好きになったことはないからみんなとは価値観が違うのかもしれないし、今時の子と比べると確かに堅い考え方なのかもしれない。

それにしても、まだ恋愛もしたことのない私が恋愛を語るなんて一体何様のつもりなんだろう。

しかも高校生の若造が幸せを語るなんておこがましいように感じる。

…私って一応女子高生だよな?なんか悲しくなってきた…

ふとさっきの告白現場で偶然お昼を過ごしていて気まずい思いをさせてしまった比企谷君を見ると、イヤホンをしたまま机に突っ伏していた。

追い出してしまったことを謝ろうと思ったけど、寝てるなら起こすのも悪いかな。てか告白場所を選んだのは伊藤君なのだから、私が謝る必要はないのではないか?

でも彼にとつてはそんな関係ないし、気づいて目が合ったのも私なのだからやはり私が謝るべきなのだろう。

たぶん今日は放課後まで質問攻めにあうだろうから明日にでも彼に謝ろう。

そう考えながら、私はブーツと彼女たちの質問を適当に流していた。

放課後、案の定わたしはクラスメイトたちの猛攻に遭い、なんとか全てを受け流すことはできたが気づけば1時間近く経っていた。

みんなどれだけ恋バナ好きなの……しかも伊藤君は思った以上に人氣だったらしく、違うクラスの人たちまで混じってて精神的にほんと疲れた。みんなはある程度喋って満足したのか、もう帰宅している。

……帰ろう。

今日は早めに勉強を切り上げてすぐ寝ようかなーと考えながら下校準備を始めていると、ふと誰かの机の上にある一冊のカバーがかかった本に目が止まった。

あその席は……確か比企谷君の。そういえばクラスの男子が比企谷君が本を読みながらニヤけてるって言ってたっけ。そんなに面白い本なのだろうか？

気づけば私は、彼の本を手を取っていた。

……いやいや、いくらなんでも彼に許可を取らずに勝手に読むなんて非常識だ。だがどんな本を読んでいるのか………気になる。

私も本はそこそこ、というかかなり読んでいるほうだ。休日も読書で潰れることが多い。

しかし彼は休み時間でもほとんど読書をしているため、もしかしたら私よりも本を読んでいて、年間何百冊目も読むすごい読書家なのかもしれない。そんな読書家の彼がニヤけるほど面白い本というのは一体どのような本なのか。

……気になる………すぐく気になる。

私の理性がいけないと言いつつも、本脳………じゃなくて本能が読むべきだ！つとと言うことを聞いてくれない。

………

そうだ！表紙だけを確認すれば読んだことにはならない！題名だけ見て後で図書館で借りてくれば問題ないはず！大丈夫だ！

と、悩んだ末なにが大丈夫なのか訳の分からない答えを導き出して彼女は本のカバーを外しはじめる。

先ほどの葛藤はどこへいったのか、興奮した様子でカバーを外し終えるとそこには…

かなりきわどい格好をした女の子が表紙の中で大きな剣を構えていた。

「……あれ？」

ある意味、想像を超えた表紙にしばらく固まってしまった。

本を持ったまましばらく呆然としていると、教室のドアがいきなり、

ガラガラツ！！

っと勢いよく開いたとき、私は、

「ひゃっ！！」

小さく悲鳴をあげてとつさに本を身体の後ろに隠してしまった。

そこには…

「あれ？優希ちゃんまだ帰ってなかったんだー！」

先ほど私を質問攻めしてうちの1人のクラスメイトが突然やってきた。

「う、うん。少し勉強してたから。」

咄嗟に嘘をついた。

「うわーさすが優等生！私は忘れ物しちゃってさー、てかさっきの悲鳴なに？びつくりしすぎでしょー！」

「あはは…私怖がりだから。」

「そうなの？なんか意外だなー。あつ、もう勉強終わったならさ、一緒に帰ろうよー！」

確かに彼女とは帰り道が途中まで同じだから、たまに一緒に帰ることがある。

しかし今はマズイ…この本をどうにかしないと。

「えーと…下校準備まだしてないし…先に帰ってもいいよ。」

あつ、今のは失敗した。そう気づいたときには、

「そんなのすぐ終わるじゃん！」

待ってるから！つと笑顔で言われるとこれ以上断ることもできないし、むしろ怪しまれる可能性もある。

「うん、ありがとう。」

つとだけ伝えると、私は手にした本をさりげなく自分のカバンの中に入れてしまった。

明日早く登校して元の位置に戻そう。うん、そうしよう。

私は本を見てしまった後悔と比企谷君に対する罪悪感でいっぱいになりながら、クラスメイトと帰路についた。

その間もどこか上の空で歩いていたためクラスメイトから、

「ボーッとしてるけど体調悪い？」

と気を使わせてしまい、またしても罪悪感にかられることになった。

後日、なんと私は寝坊をしてしまった。

というのも昨夜、比企谷君の本をパラパラとめくつていっているうちに気づけば時間を忘れるほど読み込んでしまっていたのだ。

急いで時計を見るともう短い針が3の数字に差し掛かるところだった。すぐに電気を消し布団に潜ったが、意外に面白かったなとか次はどうなるのかなとか、早く寝なければいけないのに頭の中が勝手に興奮して寝付けなくなったのである。

そして頼みの綱である目覚まし時計は無情にも私が無意識のうちに止めていたみたいで起こしてくれることはなかった。

いつもより30分早く目覚ましをかけていたのに全く意味がない。だが急いで支度していけばギリギリ間に合う。

でも比企谷君の本は…どうしよう…

私は心の中で泣きそうになりながら急いで支度して家を出た。

教室に着いたのは遅刻1分前でなんとかギリギリ間に合った。

クラスメイトの何人かが珍しいね、と声をかけてきた。私は苦笑いで返しながら比企谷君の机に視線を向けると…

そこにはカバーだけが残った机を見下ろして顔を青くしている彼

がいた。

「…っ！」

私はすぐに彼の元を駆け寄ろうとしたが、無情にも朝のチャイムが鳴り響き、同時に先生が教室に顔を出す。

私は彼の元に行くのを諦めて大人しく席に着くが、彼は出席をとっている間も机の中を必死に探し回っている。

「あいつなに必死になって探し回ってるの？」

「うわー、必死なあいつキモッ！」

周りからは白い目で見られ始め、罪悪感に押しつぶされそうになっていると先生が、

「どうした比企谷？忘れ物でもしたか？」

「い、いえ…なんでもありません。」

「そうか、じゃあ次は…」

彼は探すのを諦めたのか、下を向いてため息をつく。

その間も、彼は周りから白い目で見られ続けている。

「ごめんなさい…本当にごめんなさい。」

私は下唇を噛み、机の下で強く拳を握っていた。

最初の休み時間、すぐに彼の席に向かおうとカバンに手をかけ本を取り出そうとするがここでひとつ問題がある。

そう、あの小説の表紙である。私が本を持って彼の元に向かえば間違いなくクラスメイトたちは不思議に思う。

みんなに注目される中、あの本を渡そうとしたら彼らはどうするか？

大体の想像はつく。きっと私たちに攻撃を仕掛けてくるだろう。

私は何を言われようと構わない。それで付き合いがなくなっても、所詮その程度の関係だったということに納得がいく。

しかし、これ以上彼がクラスメイトたちに白い目で見られるのは嫌だ。

せめて彼が1人になれば…1人？

そういえばあった。彼が1人になる時間帯が。

でも、彼はいつもあそこで昼を過ごしているのかな？

昼休みに彼が教室にいたことはないはずだからきつとそうだ。
…たぶん。

そう信じて、彼には申し訳ないが昼休みになるまで待つてもらおうことにした。

午前の授業は彼にどう謝るかボーツと考えていたため全く頭に入ってこなかったが、あつという間に昼休みがきた。

すると、やはりクラスメイトたちから、

「ご飯いっしょに食べようー！」

お誘いの言葉があつたが私は、

「ごめん！今日は他のクラスの子に誘われてるんだ。」

丁重にお断りしてすぐにカバンを持って教室を出る。

そして昨日の告白された場所に小走りで向かうとそこには…

誰もいなかった。

まさか今日はここじゃない？

いや、彼は昨日パンを食べていたはずだから購買に寄っている可能性がある。もう少し待ってみるか。

昨日彼が座っていたベンチに腰を下ろし、ボーツと待ってみる。

だいぶ暑くなってきたけどここは海風のおかげで涼しくて気持ちいいや。

寝不足もあり、私は大きな口をあけてあくびをすると近くでビニール袋のかすれる音が聞こえた。そのまま顔を向けてみると…

そこには比企谷君がビニール袋を提げたまま呆然とこちらを見ていた。

そのときの私はかなり間抜けな顔をしていたと思う。すぐに口を閉じ、羞恥に顔を赤く染めていると比企谷君は…

そのまま回れ右をして帰ろうとしていた。

ちよっ！

「ちよっど待って!!？」

私は自分が思っていた以上に大きな声を出して彼を呼び止めていた。

彼はこつちを向きつつも目線を逸らしながら、

「いや、何も見てないんでほんとに…失礼します。」

「…いや、その反応は見てたって言うてるようなものだよ。」

私はジト目で彼を睨んだ。

「あつ、そいえば飲み物買うの忘れたんで失礼しま「ビニール袋から缶が透けて見えてるよ」すみません見ましたごめんなさい。」

なんて嘘が下手なんだ…

それにしても、

「ねえ、なんで敬語なの?」

さつきからよそよそしい口調と態度に疑問を持った。私の間拔けな大あくびを見てしまったから気まずく思っているからなのか。

「いや、年上には敬語を使えと両親から教育を受けてますもので。」

…はあ!?!?

「私は君のクラスメイトだよ!!?てか年上ってどういうこと!?!?」

確かにクラスメイトのノリが多少合わないところもあるし考え方もちよつと古くさいかもしれないけど…見た目はまだ年相応だと思う!そう思いたい!

すると彼は、

「チツ、なんだ同じ年かよ。」

あろうことか舌打ちをして謝りもせず去ろうとしている。

プチツ

どこかがキレた音がした。後ろから襟を掴み彼の顔を強引にこちらに向けさせると、怖がらせないよう満面の笑みで、

「ねえ、女の子を年上扱いしたことについて何か言うことはないのかな?それともご両親はそんなことも教育してくれなかったのかな?ねえ?どうなのかな?」

「いやほんとまじすみませんでしたなんでもしますんでほんと命だけは勘弁してくださいごめんなさい」

彼はまるで捕食者を前にする小動物のように怯えながら全力で謝ってきた。

そこまで怯えられるのも心外で少し腹が立ったが、人前で大きなあくびをした私もあれだし、まあ許してあげよう。

私は彼の襟を話すと彼はもう一度小さな声で、ほんとすまなかつた。と謝ってきた。

もう怒ってないからいいよ、と別れようとした私はそこで気づく。「つて、違う!!?」「ヒイツ!!?」

なぜか本題と大きくズレてしまい、むしろ逆の立場になってしまっていた。

…悲鳴をあげるほど私は怖いのか？

じゃなくて！

「実は、比企谷君に話があつてここで待ってたの。」

そう言うと彼は濁った目をパチパチさせて、不思議そうに私を見ていた。

「ごめんなさい!!?」

「…へっ?」

いきなり勢いよく頭を下げた私に彼は状況が理解できずに間拔けな声をあげた。

それはそうだ。今日初めて会話をした相手にいきなり頭を下げられたら私もこんな反応をするだろう。

「いや、えっ? さっきまで俺を殺つ…俺に怒ってた人がなんでいきなり頭下げてんの? てか女子にごめんなさいって言われると中学のときの古傷が痛むんだけど…」

濁った目を更に濁らせながらブツブツ言っている彼の前に私は頭を下げたままカバンから1冊の本を取り出して彼の前に差し出す。

「……」

彼は顔をしかめると無言でその本を手にとった。

「…昨日の放課後に君の机の上に本を見つけたからどうしてもどんな本なのか気になって、それで表紙だけ確認しようと思ってカバーを外したら…その…ちよ、ちよつとだけエッチだったから…」

「えっ? エッチだから持つて帰っちゃったの?」

「ちつ、違う!!?」

彼がドン引きながら濁った目で聞いてくるので全力で否定した。なんてこと聞いてくるんだこの男は。

「カバーを外したタイミングで友達が教室に入ってきたから…見られたら恥ずかしいと思って…とつさにカバンの中に隠したらそのまま持つて帰っちゃって…」

朝早く登校して元に戻すつもりだったと続けるつもりだったが、これは単なる言い訳にすぎない。

結局のところ、私は自分の身かわいさに盗人まがいのことをした挙句、彼はクラスメイトたちから白い目で見られるという最悪の結果になった。

許されるはずがない行為だ。

私はもう一度頭を下げ、

「もちろん許してほしいなんて言わない。比企谷君の気が晴れるなら私はなんだってするから。」

いくら罵倒されてもいい。1発くらいなら殴られてもいい。とにかく私は彼に償いたかった。

：もしかしたら私は、私自身が彼に謝罪することによってただ楽になりたいだけなのかもしれない。

それでも、言わずにはいられなかったんだ。

私は恐る恐る顔を上げると：

そこには安堵した顔の彼がホッと小さく息を吐いていた。

：へっ？なんで？

「なんだ、もしかして遂にクラスぐるみのイジメが始まっちゃったかと思っただわ。」

彼はそんなことだったのか、と私の横を通り過ぎるとそのままベンチに座って昼食のパンを黙々と食べ始めた。

私はしばらく彼を啞然と見ていたが、ハッ！と意識を引き戻すとすぐに彼の元に詰め寄った。

「そんなことかって…私は君の本を勝手に持って帰ったし、そのせいで嫌な思いさせたんだよ!!？」

「嫌な思いって？」

「それは…いじめられてるって勘違いさせたり…周りから白い目で見られたり…」

「ハッ、こんなの中学のときに比べたら全然ましだ。むしろ暖かい目で見守ってくれてると勘違いしちゃうまである。それに実際イジメじゃなかったんだからこの話はこれで終わりだ。」

そう言うと彼はまた昼食を再開した。

何か言おうと思ったが言葉が出てこない。私は一瞬だけ本当に私は悪くないのではないかという馬鹿な錯覚に落ちかけていたがそんなはずはないと頭を振ってその馬鹿な錯覚を払拭すると、

「そんな訳ない！私は無許可で君の本を持って帰ったんだから、盗みを働いたんだよ！ドロボーだよ！君は犯罪者を許すっていうの!？」

「いや、なんかスケールデカくなってきてない？お前は本を返して謝ってきたから俺はそれを許した。それでいいじゃねえか。」

「よくないー！だから、「あー、わかったからとりあえずメシくらい落ち着いて食わしてくれ。お前だって食ってないんじゃないか？昼休み終わっちゃうぞ。」

彼は心底面倒くさそうな顔をしながら袋をあさっている。うーつと睨むと彼は素知らぬ顔で黄色い缶を傾けている。

観念した私は大きな溜息をついて彼の横に座った。

「…なんで隣座るの？」

「君の言った通りご飯食べてないからだよ。」

「いやいや、教室で食べよ。」

「教室に戻って食べたら時間なくなるでしょ。」

「なんの？」

「さっきの続き。」

「冗談だろ…」

正直さっきの続きと言ってもほとんど彼に論破されている状況であり、反撃するためのカードはもう残されていない。

それでも、そう簡単に許すと言われても納得のいつていない私はなにかを言いたいのだ。

まるで駄々をこねる子供だ。

とりあえずご飯を食べてから考えよう。腹が減ってはなんとやらだ。

カバンをあさり、弁当を取り出そうとするが、

「あつ」

朝の支度を急いだせいで完全に忘れていた。

ホント、私は昨日からなにをやっているんだろう。

勝手に人の本を持ち帰り、寝坊をし、謝らなければならぬ相手逆逆に謝らせ、許すと言ってくれた彼に納得いかずかみついでいき、トドメにお弁当を忘れる。まさに負のスパイラルだ。

ダメだ…こんなところで泣いたらまた彼に迷惑をかけてしまう。

涙をこらえ、早くこの場所から離れようと腰を上げようとしたと

き、私の目の前におつきなメロンパンが現れた。

「ほれ。」

私は潤んだ目を大きく開いて彼を見た。

「…他のパンが思ったより大きくてな。更にこんなでさえメロンパンなんか食つちまったら太つちまう。そして妹に、太ったお兄ちゃんはキライ！と言われた俺は生きる意味を失ってバッドエンド。ってな人生はごめんだからな。まあ人助けだと思って代わりに食つてくれ。」

長々と喋った彼はそっぽを向きながらメロンパンを差し出してくる。

それを私は受け取ったあと、別の意味で溢れそうになった涙をそつと拭つて、小さな声でお礼を言った。

「…ありがと。」

「…おう。」

彼もぶつきらぼうに返事をする、お互い無言でパンを食べ始めた。

食べ終わったあともしばらく無言でベンチに座っていた。

先ほどの続きをする気はもちろんなくなり、いつの間にか始まったテニス部の練習をお互いにボールツと見ていた。

しかし、私の頭の中はさつきのやりとりのことをひたすらに考えていた。

彼は私にメロンパンを渡したとき、どんな気持ちだったのだろう。

彼からすれば、私はとても面倒くさい女だろう。

散々迷惑をかけられた挙句に目の前で泣きそうになる女なんか面倒極まらない。

そんな私に彼はなぜ優しくしてくれたのか。

彼の話した通り、太って妹に嫌われたくないから？

全くありえない話ではないが…うん、これは除外しよう。

次に…私のことが好きだから？

お互い初対面で会話もしたこともないのにそれはないだろう。

そういえば1人、会話もしたことないのに告白してきた人はいた

が、彼にとっては最悪な印象でしかない私に好意を抱くようなことはまずありえないだろう。

じゃあ、私が泣きそうになってたから同情して？

うん。やつぱりこれが一番妥当かな。

目の前でご飯が無くて泣きそうになってる子を見たらやつぱり目の前で食べづらいし、どんな人でも分けてあげようって気にもなるよね。

…別に私はお弁当を忘れて泣きそうに訳ではないのだけど。

しかし、ムキになって彼にかみついでいくとこといい、私はこんな子供っぽく感情を剥き出しにする人間だったのだろうか？

…やばい、すごく恥ずかしい。

1人、羞恥に顔を朱に染めていると、彼はおもむろに立ち上がり大きく伸びをした。

「それじゃ、教室戻るわ。」

「えっ？あつ、うん…」

気づけばもうすぐ昼休みがおわる時間になっていた。

私の歯切れの悪い返事を聞いて、彼はなにを勘違いしたのか、

「あつ、弁当忘れて泣いたことは誰にも言わんから安心してくれ。そして話す友達もないから更に安心してくれないか。」

…やつぱりそう思われていたみたいだった。

自虐ネタを含めて私を安心させてくれているのはわかるが、

「違うから！別に弁当を忘れて泣いてた訳じゃない！いや、それも違って…別に泣いてないし!!？」

「いや、でも目が潤んでたし。」

「それは…目にゴミが入っただけだから！」

「ベタすぎんだろ…」

さっきの羞恥心は一瞬でどこかへ飛んでいってしまったらしく、ギャーギャー言い合っているうちに無情にも昼休み終了のチャイムがなった。

校舎裏での出来事から数日が経って現在はお昼休み、私はあの日から毎日を悶々と過ごしていた。

理由はやはりあの日の帰り際に言われたことである。

あの日、彼に恥ずかしい所を散々見られ、誤魔化すためにも適当な言い訳をしている最中にふと思いついた。

「あつ、そういえばさっきのメロンパンのお金なんだけど、教室に帰ったらすぐに返すから。」

食べ盛りの男子高校生にとっては貴重であろうお昼ご飯を分けてもらったあと、色々考えこんだり言い合い（私がほぼ一方的に）をしていたため、そこまで頭が回っていなかった。

しかし彼は、

「いや、別にいらないから。」

と顔の前で手を振って私の申し出をすぐさま断る。

「それは駄目！君に散々迷惑をかけたのに、ご飯までタダで貰うなんてできない！」

「俺は太りたくないからお前に手伝って貰っただけだって言ったじゃん。むしろ妹に嫌われなくすんでこっちは助かってんだよ。」

むーっ…そんな見え見えのウソで誤魔化そうとして。彼は私と同様、いや、私以上の捻くれ者だ。

だったら…

「仮にそうだとしても私は他人から無償で施しを受けるのがイヤなの。だから私の自尊心を保つためにも、絶対に払うから。」

これ以上みじめな思いはしたくないということもあるため、言っていることは別にウソではない。

「…頑固なやつ。」

「…君に言われたくないよ。」

「…しかも捻くれてるし。」

「それだけは君に言われたくないよ!!？」

私も大概だけど、彼ほどではないと信じたい。

「それじゃ、金は適当に机の中にでも入れといてくれ。あんまり人に見られないようにな。」

「どうして? 帰ったら直接渡すよ。」

「いやいや、直接とか目立ちちゃうでしょ。」

「別にお金を返すだけでよ? 別に目立つことじゃないよ?」

「普段からぼっちな俺がいきなり他人に話しかけられてみる。周りは何事かと思っただけだろ。」

「それはさすがに自意識過剰じゃないかな?」

「まあ普通の人なら問題ないかもしれん。だがお前みたいなりア充っぱいやつが話しかけてきたら話は別だ。」

「りあじゅう?」

怪獣の名前? そうだとしたらかなり失礼な気がするが。

初めて聞く言葉に小首を傾げていると、

「まじかよ...とにかくお前みたいなのやつが俺なんか話しかけてきたらぼぼ間違いない注目してくる。そうなる俺の平穩なぼっちライフが悲惨なぼっちライフになる可能性もあるからな。」

あれ? どっちもぼっちだから変わらないのか? つと彼は一人でブツブツ言っている。

「君が目立ちたくないのはなんとなくわかったけど、なんで私だと、りあじゅう? になつてみんな注目するの?」

私だとダメな理由でもあるのか? と疑問に思っていると、

「...逆にこれだけ自覚がないってのも考えもんだな。」

と、彼は訳のわからないことを言っている。

「ねえ? それってどういう、」

こと? と続けようとしたが、そこでチャイムが昼休み終了の鐘を鳴らす。

彼はヤベツ、と即座に荷物をまとめると、

「とにかく、教室では絶対に話しかけるなよ! これでこの話は終わるだからな!」

「ちよっ! 待っ!」

そう言っただけで彼は一方的に話をまとめると、早足で教室に戻って行く

てしまった。

そうして何日か経ったが、彼にはずっと話しかけられずに今に至るわけである。

正直彼にはまだ聞きたいことがたくさんある。

なぜ私を簡単に許してくれたのか？

彼が言った自覚がないとはどういうことなのか？

そして…りあじゆう、とはなんなのか？

わからないことが多すぎて頭の中がグチャグチャになっている。

いくら考えても答えは出てこず、いつものようにブーツとしていると、

「優希、いつにも増してブーツとしてるねー。」

後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

振り返るとそこには同じ中学でよく相談に乗ってくれたり遊んだりした私の唯一とも言える親友、藤堂桃花《とうとうとうか》が笑顔で立っていた。

「桃花…どしたの？」

「どしたのって、お弁当一緒に食べる約束してたじゃん！」

「いや、約束した記憶が全くないのだけど…」

「そだっけ？まあ、親友に会いに来るのに理由なんかいらなっしよ！」

人懐っこい笑顔でそういうと向かいの席に、ちよっち借りるねー、っと本人の了承も得ず、勝手に向かいの席に腰掛ける。

桃花のいきなりの登場に周りからは、

「見ろよ、藤堂さんだぜ。」

「やっべー超可愛い。」

「なんか守ってあげたくなるよなー。」

「ギョツしてー…」

口々に賞賛の声があがる。

彼女は中学のときからその人懐っこい笑顔と見た目に似合わずサバサバした性格で人気があった。

高校に上がってからは髪を少し茶色く染めてショートボブにし、制

服を適度に着崩し化粧も薄くしている。まさに今時の女子高生って感じで同性の私から見てもかわいい。

ただ、彼女は身長が平均よりも低い…いや、かなり低いことにコンプレックスをもっており、間違ってもそのことを口にしてはいけない。

昔、クラスの男子に幼女とバカにされて大暴れしたのは今でも鮮明に覚えている。

…あれは悲惨だった。

だが普段はその明るさとサバサバした物言いで誰からも頼られる姉御的な存在で、それは高校生になった今も変わっていない。

中学のときは本当にお世話になり、こんな私を親友と呼んでくれる彼女にとっても感謝している。

そして、今回もここ数日間悩んでる私を心配して声を掛けてくれたのだろう。

ほんと私には勿体無いくらいできた親友だ。

「で？我がが学園のアイドル、優希ちゃんは一切なにをお悩みなのかなー？」

いやいや、こんな愛想のない私なんかよりむしろ桃花のほうがアイドルじゃん。知らない人なら勘違いしてもおかしくないくらいには。

「私がボーツとしているのはいつものことだよ。知ってるでしょ？」

「そりゃ優希がボーツとしているときはいつも面倒くさいこと考えてるときだっていうのは知ってるけどさ。」

失礼な、別に面倒くさいことばかりではない。

例えば……あれ？出てこない…

「今は面倒くさいこと考えてるときだねー。優希ちゃんは分かりやすいですねー。」

桃花が、席を立って、おーよしよし、と頭を撫でてきたのでムツとしてその手を振り払うと、

「もう、恥ずかしいからやめて。…私ってそんなに分かりやすいのかな？」

「優希は声や表情には出さないけど雰囲気やちよつとした仕草で付き

合いの長い人にはすぐバレちゃうよねー。」

そうなのかな？自分では全然わからないや。

「でも今回のボーツはいつものボーツとちよつと違うんだよねー。なんていうか…いつもより深刻な感じがするんだよねー。」

…この子、私よりも私のこと知ってそうでなんか怖い…

「まあどうでもいいことでもいいからさ、なんか話してみてよ！てかぶっっちゃけ暇なんだよねー！」

ニヒヒツ、と笑う桃花にジト目で睨みながらも感謝する。

彼女はいつもこうやって冗談を交えて悩み事を話しやすい雰囲気をつくり、心を軽くしてくれる。

中学のときも彼女のこういった気遣いに何度救われたか。

私は力を抜いてフツと笑うと、

「じゃあ親友の桃花ちゃんに聞いてもらおっかな。でも、そんなに面白い話でもないんだけどね。」

もしかしたら色々な人から相談を受けていた桃花なら、私では見えないものが見えるかもしれないという期待も込めて、相談にのつてもらうことにした。

「まっかせんしゃい！とりあえず場所変えて話そっか。」

「よろしくお願いしますー！」

そうして私達はあまり人気のない屋上に向かい、私はここ数日の出来事を親友に全て明かすことにした。

屋上に着くと、真夏の日差しがギラギラと私たちを容赦なく襲ってきた。

「あつ、暑い…」

「さすがに外で食べる人はいないかー。」

教室は冷房が効いているため、わざわざ外に出るような物好きは彼くらいだと思う。

屋上に向かう際、彼の席を確認してみたけど、いなかったから多分あの場所だろう。あそこは風が抜けて涼しいから、多少暑くても大丈夫かな。

私たちは日陰を見つけると、そこに腰を下ろしてお弁当を広げた。

「それじゃ、なにがあつたのか全部話してごらん？」

彼女はお弁当に手をつけず、座り直して話を聞く体勢をとる。

しかし、全部か…

なにせ彼とのファーストコンタクトは、見事私の痴態をさらけ出す結果となった。あんなことをいくら親友とはいえ、他人に話すのはかなり気が引ける。

最初から私が恥ずかしくて言いづらそうにしていると桃花は、

「あつ、もちろん全部だからね。もしかしたらそこに優希の悩んでる事の答えがあるかもしれないからね。」

「…笑わない？」

「あつたりまえじゃん！親友が真剣に悩んでるんだから、真剣に答えるのが筋つてもんでしょ！」

まっかせなさい!!?と大きな胸をドンと叩いてニコツと笑う。

やはり桃花は頼りになる。

こういうかつこいいところは本当に尊敬する。いつか私も桃花みたいに強くなりたいな。そして胸も…

私は意を決して、彼女に事の顛末を全てを打ち明けた。

…：前言撤回。今の桃花に対しては尊敬もなにもない。私は数分

前に馬鹿正直に話した私を呪っていた。

桃花は私が話している最中も終始プルプルしてて、全てを打ち明けたと同時にお腹を抱えて大笑いしだした。

「笑わないって言ったのに！言ったのに!!？」

「だっ、だって！まさか、そんなっ…ププツ…ゆっ、優希が…かわいすぎて！比企谷君も…サイツコー!!？」

桃花はまだヒーツ！とか、お腹いたいー！とか言って笑い転げている。

とりあえずこの行き場のない感情を発散するために、桃花の好物をいくつか食べてやった。

ようやく笑いが収まってきたのか、ゴメンゴメン、と片手を上げて謝ると私の方に向き直り話し始める。

「いやいや、私の予想以上におも…楽しいことがあったみたいだねー。」

「全然楽しくないよ…しかも面白いも楽しいも大して変わらないから。」

桃花をジト目で睨むと彼女は、

「ゴメンゴメン。でもさ、優希ってこうやって感情を表に出せる相手って学校だと私以外いなかったじゃん？私だってここまで優希の表情を出すのに1年くらいかかったのに、比企谷君とは初めての会話で感情を剥き出しにして話したんだよね？それって初めての経験じゃない？」

「たぶん…」

「そっかー。優希の初めての相手の比企谷君…どんな人か気になっちゃうなー♪」

「他の言い方があるでしょー！」

「ね？比企谷って優希の印象的にどんな感じの人？」

桃花が目をキラキラさせて私に顔を近づけてくる。

ハアツ、とため息をつくとき少し考える。

彼の印象か…一言で言うと、

「捻くれ者」

「へっ?」

「すごく捻くれててウソが下手くそで私の意見を聞いてくれない頑固者!」

彼の印象を一息で言いきると、彼女はまた大声で笑いだした。

「アツハハハハ!!?まさか優希から捻くれ者って言われる人がいるなんて!」

「私だって自分が捻くれてるのは自覚してるよ!でも比企谷君はそれ以上の!」

「わかったわかった!ハーツ、笑い疲れた。でもさ、ほんとにそれだけ?」

「なにが?」

「比企谷君の印象。他にあるんじゃない?」

彼女はなんでもお見通しだ。そしてちよつと怖い…

でも、確かにそんなことよりも、もつと強い印象が残っている。

それは…

「確かに…ぶつきらぼうだけど…ちよ、ちよつと優しかったりするところは…あるかなって…思ったりは…した…けど…」

彼は、私に落ち目がないよう下手なウソをつけて私の心を軽くしてくれた。

それは、私が今まで貫ってきた優しさとは違う種類の優しさで、裏表がなく見返りを求めない純粹な優しさだと感じた。

なんでだろう…あのときのぶつきらぼうだけど暖かく、優しい彼を思い出すと、顔が熱く…

「ほーっ、へーっ。」

「…!!」

「なーるほどねー、そっかー。比企谷君はやさーやつ、やつぱり日陰でも外は暑いね!」ハイハイ、ソーダネー。」

「くっ!彼の印象についてはもういいでしょ!他に聞きたいことあるから!」

「んー?なにかな?」

「比企谷君はなんで私を簡単に許してくれたと思う?普通そんな勝手に

な事されたら怒ると思うんだけど。」

私が彼の立場だったら、そう簡単には許せなかったと思う。

「うーん、彼が優希に惚れちゃってるのかは？」

「こんな勝手なことした私に好意を持つと思う？ありえないよ。」

「いやいや、わっかんないよー？私が比企谷君の立場だったらこんな黒髪セミロングの清楚系美少女がいきなり目の前に現れたら、お近づきになりたいなーって思っちゃうもん♪」

「桃花つてたまに意味のわからないこと言うよね？要するに一目惚れってこと？」

「そうそう♪」

「それは絶対じゃないと思う。だって彼、私が隣に座ったらすぐく嫌そうな顔で教室に帰れて言ってきたから。」

なにより1番最初に私の間抜け面を見てるし、怯えさせちゃったし

…

最悪と言っていていい出会い方で一目惚れなんてまずありえないだろう。

「うーん、こればかりは比企谷君に直接聞いたほうがいいかもねー。私たちが彼の考えてることなんて分かるわけないし。」

桃花の言う通り、この前話したばかりの彼のことなど考えても答えなんて出るはずもない。

やはり直接彼に聞いたほうが早いだろう。

しかし…

「でも、確か教室では話しかけるなって言われてるんだっけ？」

「うん。だから直接聞くことはできないんだよね…」

もし彼の言った通り、私が話しかけることによって迷惑をかけることになってしまったなら、今度こそ私は許してくれないだろう。

そうなるのはもちろん嫌だ。彼に迷惑はかけたくない。でもやっぱり知りたいと思う気持ちもある。

どうしたらいいだろうと悩んでいると、突然桃花が、

「わかったーそこは私にまっかせなさいー！」

と私の肩を叩いて自信満々に声をあげた。

「まかせなさいって…どうするの？」

「そこはお楽しみってこと♪」

…嫌な予感しかない。

彼女がこうやって張り切るときは大抵ロクなことにならない。中学のときも何度、彼女の無茶ぶりに付き合わされたことか…

「お願いだから、無茶だけはしないでね…」

「そんな心配しなくても大丈夫！中学のときみたいなバカなマネはしないからさ！」

やっぱり自覚はあったんだ…あつ、

「そういえば比企谷君に自覚がないって言われたんだけどどういう意味分かる？」

「ああ、話しかけるなって言われたときね。そこは私にもわかるな。確かに優希は自覚が無さすぎる！」

「えっ!??どういう意味?教えて!??」

さすがは桃花。私がわからなかったことが話を聞いただけで一瞬で理解した。早速教えて貰おうとしたが、桃花は、

「ニヒヒツ、そこも比企谷君に教えてもらいな♪」

「なんで!??いま教えてくれてもいいでしょ?」

「まあまあ、そこも私があるとかしてあげるから我慢しな！」

そう言つて彼女はニヤニヤと私を見ている。

この表情をしているときもロクなこと考えてないと長年の付き合いで理解するが、彼女にこの件を一任した手前、私にはどうすることもできない。

そのあと私が疑問に思ったことを幾つか質問（りあじゅうの事とか）した後、お昼休み終了間近、そういえばまだお弁当をほとんど食べしていないことを思い出し、急いでかきこんだ。

「ああー！ー！私の唐揚げと卵焼きがなー！い！！？」
桃花の叫び声が真夏の空に響き渡った。

お昼休み終了間際、お弁当を食べ終えた私たちはすぐさま教室に戻った。

すると、別れる際、桃花はこちらに振り向いて、

「そうそう、今日の放課後だけどき。ちよつち一緒に行きたいところから空けといてねー。少ししたら迎えにいくからさー。」

「えっ?ちよつ?」

また後でねー!と、こちらの返事を待たずに手を振ってそのまま走って行ってしまった。

ハアツ、ほんと強引なんだから。今日、何回目かわからないため息をついて、私は自分のクラスにまつすぐ戻った。

全ての授業が終了して放課後、私は桃花との強引な約束を果たすため、みんながいなくなったあと机に座っていた。ただ待つのも暇なので今日の授業の復習をすることにしたが、準備をしている最中、私の席に人影ができた。

桃花かな?と思い見上げると、そこには数日前に私に告白してきた伊藤君の姿があった。

「やあ、夕舞さん。」

「こんにちは、伊藤君。」

彼は爽やかな笑みで挨拶を済ませると、そのまま私の対面の席に桃花同様、無許可で腰を下ろした。

「何してるの?」

「友達を待ってるんだけど、まだ来ないみたいだから勉強しようと思ってる…」

「じゃあその友達が来るまで僕の話に付き合ってよ。」

「えっ、うん。」

今日はクラスメイトが部活やら何かしらの用事があるやらで早々に教室から抜けたため、話しかけてくる人がいなかった。正直、桃花が来るまでに予習をある程度済ませておきたかった。だが、告白を断った手前、彼の提案を無下にすることはできなかった。

「夕舞さんってさ、休日はいつもなにしておごしてるの?」

「大体は勉強をするか読者したりしておごしてるかな。」

「へー、僕はあんまり本は読まないかな。ほら、部活が忙しいからさ、帰ったらすぐ寝ちゃうんだよね。」

「そうなんだ。」

「部活がない日は友達と遊びに行ったりするし、あんまり1人でいる事ないんだよね。おかげで勉強が進まないよ。自業自得なんだけどね。」

ハハハツ、と彼は笑っているが、どこが面白いのかさっぱりわからない。とりあえずこちらにも笑顔を作るが、上手く笑えたかどうかかわからない。

「そうだ、そろそろ夏休みに入るよね。夏休み中、一緒に勉強しない?」

「えっ?」

「と言っても、夕舞さんは成績いいから僕が一方的に教わる形になると思うけど。友達を助けるためだと思っさ…お願いします!」

ここで友達ときたか…

ごめんなさい、という言葉が喉まで出かかったが、それを無理やり飲み込んだ。ここで断ったら彼はこの出来事を他の人に話すだろう。ただでさえ私に対してあまりいい感情を持っていない女子も少なくないのに、更に敵を増やす形になってしまう。誘いに乗ってもいい顔はされないが、この場合は断ったほうが多くの敵を作るということを経験上、私は知っていた。

私はただ平穏な高校生活を過ごしたいだけなのに、これ以上厄介ごとが増えるのはまっぴらごめんだ。

…いや、違う。

私は人に悪意を向けられるのが、ただ怖いだけなのだ。だから私はたとえば自分の苦手な話でも、クラスメイトたちの話にヘラヘラと愛想笑いで適当な返事をする。桃花はそんな私を優しい子と評してくれるが、それは間違いだ。

私はただ…

「夕舞さん？」

「…ごめんなさい！少し考え事をして…」

「全然いいよ。それに考え事してる夕舞さんも綺麗だったから見れてラッキーだよ。」

彼は恥ずかしげもなく歯の浮くようなセリフを口にした後、私は次の一言で一瞬、呼吸が止まった。

「あとさ…夕舞さんのこと…優希って呼んでいい？」

「…!!？」

彼は今日1番の笑顔で私に問いかけてきたが、冷房の冷気がまだ残っているこの教室で、私は背中から汗を流していた。

(君のこと、優希って呼んでいい?)

過去の記憶が瞬時に蘇る。

私になにも言えずにいることに彼が訝しんでいるとき、

「ゆ・う・き・ちゃん!!？」

教室のドアから、場違いな明るく元気な声が聞こえてきた。目を向けると、そこには親友がニコニコしながらこちらに手を振っている姿があった。

「って、あららー?まさか私、お邪魔だったかなー?」

「いや、大丈夫。それじゃあ伊藤君、バイバイ。」

「…うん、また明日。」

私はカバンを持ち、伊藤君に上手く笑えたかわからない笑顔で挨拶をすると、すぐさま桃花の元に駆け寄った。そのまま教室を出て、廊下を少しの間、無言で歩く。

「…ごめんね。」

「ううん…ほんとはね、少し前から見てたんだ。伊藤君も彼なりに頑張っていると思ったからさ、邪魔するのはちよつと気が引けてね。もつと早く声かければよかったね。だから…ごめん。」

「違う!桃花は全然悪くない!もちろん伊藤君だって!全部私が…」

「はい…この話はしゅーりよー!!?こっからは明るい話題オンリーだかんねー!もちろん破ったら罰ゲームだから♪」

桃花は明るい声でこの空気を払拭すると、鼻歌を歌いながら前を歩

き始めた。

：敵わないなあ。また桃花に救われちゃった。前を歩く彼女の小さな背中が大きく見える。

早く、桃花と肩を並べて歩きたいな。そして、今度は私が桃花が困ったときに助けるんだ！

そう心に固く誓い、周りに誰もいないか確認したあと、後ろから勢いよく桃花に抱きついた。

「そういえばさ、行きたいところって言ってたけどどこなの？」

中学のときから一緒に出かけることは多々あり、いつもは桃花が私を連れ回していたのだが、今回は少し趣向が違った。

「実はさー、優希が比企谷君と話した場所が海風が心地よかつたとか落ち着くとか言ってたからどんな場所か気になっちゃってねー。私も案内してよー。」

「えっ？全然いいけど…でもそんな楽しい場所じゃないよ？」

「いーんだって！優希が好きな場所がどんなところか知りたいだけ♪」

桃花の答えに私の頬は自然と緩む。

そんなことなら喜んで案内するよ。

今の私はとても上機嫌だと自分でもわかるくらいで、今なら親友のお願い事をなんだって聞いてあげる気でさえいた。

私は珍しく終始笑顔で、彼女をあの場合所に案内した。

校舎裏が近づくにつれ、テニス部の掛け声が近くなっていく。

もうすぐ到着だ。桃花とたわいもない話をしながらもうすぐ着く旨を伝えると、彼女はニコニコしながら、りよーかーい！と元気よく返事する。

ここの角を曲がればあの場所だ。あの子の彼とのやりとりを思い出して、屋上の上のときみたいになぜか顔が熱くなる。

私は小さく頭を振り、気持ちを落ち着かせてから角を曲がる。

「着いたよ。ここ……が……」

私はよく本で出てくる、絶句という言葉は今まさに体現しているのだと思う。

そこには…

心地よい海風に身を吹かれながら読書をしている比企谷君がいた。彼は本に集中しているからか、それとも私の声がテニス部によつて掻き消されたかはわからないが、まだ気づいている様子はない。

私はしばらく茫然としていたが、これが親友による策略だということに気づくまでそう時間はかからなかった。

勢いよく後ろを振り向くが、そこには最初から誰もいなかったと言わんばかりに、校舎の角と一本の木が申し訳なさそうに立っているだけだった。

パタン

後ろから、いつもの聞き慣れた本を閉じる音が聞こえたので恐る恐る振り返ると、そこにはしかめっ面をした彼が私を見ていた。

「…てか、なにしてんの？」

このときの私の顔は、たぶん熟れたトマトのように真っ赤になっていたと思う。

…なんで私は屋上での嫌な予感を忘れていたのだろうか。

…なんで私は彼女のあの何か企んだときの顔を忘れていたのだろうか。

突然、私の携帯がメールの受信を知らせる。

メールの送り主は藤堂桃花。

携帯が壊れるんじゃないかと思うくらいの勢いで内容を確認すると…

【あー！私ってば愛しの大親友から買い物頼まれてるんだってーΣ（?。?ノ）ノ

ってことでお先に失礼しまーす、——☆

追伸

お礼なんていらさないからね！

親友の輝く笑顔…：プライスレス…

愛しの大親友より♡】

「とーかー！ー！！！」

気づけば私は愛しの大親友の名前を叫んでいた。

もちろん彼の存在を忘れて。

「あつ、あのー、」

「なに!？」

「ひっ!か、帰ってもよろしいでしょうきや?」

「……」

そこでようやく彼の存在を思い出した。

………しばしの静寂。

私は無言で彼に詰め寄った。

「忘れてくれる?」

「へっ?」

「忘れてくれる?」

2回目はそれはもう花が咲くほどの満面の笑みで彼にお願いした。

「ひっ、ひゃい!」

彼はとても元気のいい声で返事を返してくれた。

またやってしまった…

どうしてこうなってしまうのだろう。

顔から火が出るほど恥ずかしい思いをして数分後。

桃花の策略に見事ハマってしまった私たちは今、少し距離を置いてベンチに座っている。

「……」

「……」

時間にしておそらく1分程度だと思うが、感覚的にもう10分くらい経ったのではないかと思えるほどの気まずく長い沈黙が私たちを襲う。

彼の方に視線を向けると、とても居心地が悪そうに視線を動かしたり指をいじったりしている。

私がかたもや痴態を晒した後、彼はそそくさと私の横を通り過ぎて帰ろうとしたがその瞬間、勢いよく彼の腕を掴んで引き止めてしまった。

話があるからと言い、強引にベンチに座らせたまではよかった（のか？）が、なにせいきなりのことだったため、話したいことがまとまっていなかった。そして、お互い言葉が出てくることなく、今の状況に至るわけである。

どうやら私は、イレギュラーにとてつもなく弱いということを今日、初めて知った。とりあえずなにか話さなくては…

頭の中をフル回転させて、話す内容をまとめようとするが、そこで私の視線と彼の視線がぶつかってしまう。

「……」

首がもげるのではないかと思うほどの勢いで反対方向を向いてしまう私。何をやっているんだ私は…

落ち着け…

彼には前にも恥ずかしいところを見られたではないか。

今更どうということはないはずだ。

もう大丈夫だ。

意を決して彼に体を向け、話しかけようと息を吸い込んだ、が…

「…なあ？」

「ふえ？」

先に沈黙を破ってきたのは彼だった。出鼻をくじかれた私は、肺に空気を溜めたまま返事をしたため、とてつもなく間抜けな返事になる。

…落ち着け。

熱くなつた心と顔をクールダウンさせ、冷静な対応を心がける。

「…なに？」

よし。若干声が上がっている気もするが、概ねいつも通りだ。

「…話があるんじゃないか？」

彼はすぐく何かを言いたそうな顔をしていたがそれを引つ込めて、早く本題に入るよう促してきた。

そうだ。親友の策略とはいえ折角くれたチャンスだ。

長く息を吐いて気持ちを仕切り直し、彼の目をまっすぐに見た。

「…うん。この前のことをもう一度あやまりたいのと、お礼を言いたかったんだ。」

そう。私は何よりもまず、彼にもう一度あやまりたかった。

彼には全て正直に話そうと思う。

たとえば…彼から嫌われることになっても…

「この前のことって、本のことか？あれはイジメじゃなかったって分かったし、もう終わったことだから別にいいって言っただろ。」

「君はそう言ってくれるけど、無断で本を持って行ったのも事実だし、そのことで君にイジメが始まってしまったんじゃないかって思わせたのもまた事実なんだよ。結果がどうであれ、そうなのは間違いない。私のせいだよ。」

「……」

「それに…あのときの君の言葉は、私を氣遣つてのことか、単純に面倒くさくて早く終わらせたかったからなのか、それとも真実なのか分か

らない。でも…」

一度言葉を区切り、深く息を吸ってお腹に力を入れた。

「私は、君の言葉に甘えてしまった私自身が許せなかった。すごく腹が立ったし、なにより…悲しかった。だから、私は君に許してほしくて謝ってるわけじゃなくて、ただケジメをつけるためにあやまってるだけかもしれない。

本当に…ごめんなさい。

それと、私のこんな下らない自己満足の話に付き合ってくれて…ありがとう。」

言ってしまった…

今度こそ彼は私を許さないだろう。

なにせ、私は彼の気づかいを踏みにじったのだ。

それでも、理由は分からないけど、私は本音で彼に全てを話したかった。いや、本音で話さなければいけないと思ったんだ。

…嫌われただろうな。

そう思った瞬間、まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われた。

胸が苦しい…

彼のこれから発せられるであろう言葉が怖い。

ヤバイ…脚が震え、頭がクラクラしてきた。

人から嫌われるのは中学のときに体験している。仲良く話していた友人からの突然の拒絶。あの時の深い悲しみは忘れたくても忘れられない。

(私が黒川くんのこと好きだってこと夕舞さん知ってたよね!?)

(ち、違う…私はなにも…)

(何もしてないのに黒川くんが告白するわけないでしょ。)

(三好さんかわいいそう…)

(サイッテー…)

突如、あの時の出来事がフラッシュバックする。

ダメだ…

息が苦しくなって呼吸が荒くなる。

高校に入ってから一度もなかったのに…

「お、おい！」

久々の過呼吸の苦しさに、私はその場に膝をついた。

「落ち着いたか？」

「うん…」

それから30分後、どうにか呼吸が落ち着き、私は彼が買ってきてくれた水を飲みながら気持ちも落ち着かせていた。

「…対応、慣れてたね。」

「あー、前にこま…妹がな。よく過呼吸になってたから自然とな。」

「そっか…」

そして、またしばらくの無言。

これ以上、彼に迷惑はかけられない。

腰掛けていたベンチから立ち上がり、彼に頭を下げた。

「本当にごめんなさい。君には迷惑をかけっぱなしだね。もちろん私に言いたいことはいっぱいあると思う。」

「そうだな。」

胸がズキリと痛む。

「だから、今から君の言いたいこと、全部聞くよ。」

「待て。ついさつき過呼吸になったばかりだろ。今日はもう帰って後日にでも…」

「ダメなの!!？今日を逃したら、私はこれから毎日、君から逃げてしまうかもしれない。」

「……」

「だから、お願い…今、話して…」

「…分かった。」

彼は何かから話そうか迷っているのか、しばらく沈黙が流れた。

あの日から、高校に入って強くなると決意したのに、結局のところ私は何も変わっていない。

でも、ここで彼の言葉を全て受け止めることができれば、少しは強

くなれるのかな。

私は再度、どんな結果になろうとも全て受け入れることを決意して、彼を真つ直ぐにみた。

そして彼は何を話すか決まったようで、こちらに向いてゆつくりと話し始めた。

「じゃあ、お前が最初に謝ってきたことだが…」

「…うん。」

「そんなんさ、当たり前のことじゃね?」

「うん…え?」

一瞬、何を言われたか分からなかった。当たり前? そんな…

「そんなわけ「まあ最後まで聞け。」…はい。」

「謝るって行為はその人に許してもらいたい、反省してますって意味が一般的だろ。でもそれじゃ半分なんだよ。じゃあもう半分はなんだ?」

「…私と同じってこと?」

「そうだ。謝ったという事実が自分の中に欲しいだけなんだよ。たとえ相手がまだ怒ってても謝ったけど許してくれなかったって事実があれば多少は諦めがつくだろ。それにお前の言うケジメってのもつく。」

「違う! みんながみんなそうじゃないよ! 私だけかも知れない。」

「そんなこと言ったらキリがないだろ。それでも謝りたいってんなら教会にでも行って神父にでも聞いてもらってくれ。それに…」

「…?」

「自分だけかも知れないとか言ってるけどな、俺だってそうだ。」

「……!」

「むしろ俺が謝る理由なんか半分どころか9割以上が自己満のためだぞ。」

そう言っ胸を張る彼。

…参ったな。

これ以上こつちが何を言っても無駄だ。何を言い返しても勝てる気がしないや。

言っていることはどうかと思うが、それでもウソかホントか分からない彼の言葉に甘えてしまう。

なにより…俺だってそうだ、といってくれたとき、本当に嬉しかったんだ。

あんなにも彼に甘えた自分に憤りを感じ、悲しい思いをしたのに、今は安心してしまっている自分に、私って単純だなって考えてる自身に少し呆れる。

本当に…

「ほんと…君は捻くれ者だね。」

「…お前もな。」

「…そうだね。」

そう言っただけは空を見上げた。夕陽が空を夕焼け色に染め上げていた。私は小さい頃に母と今日みたいな綺麗な夕焼け空のなか、手を繋いで家に帰った時のことを思い出していた。

あのときみたいになんか心があたたかい…

ドクン…

気づけば私は彼の左手に自分の右手を重ねようとしていた。

(…!!?)

その事実を知るや否や、急いで右手を身体の前に引き戻し、左手で右手の甲をさすった。

なに？今の…私は今、何をしようとしていた？

勝手に動いた身体にパニックになりながら、私は必死に落ち着かせようと胸に手を当てて軽く深呼吸をした。

「おい？大丈夫か？」

彼は私の浅い深呼吸を過呼吸と勘違いしたのか、慌てて私の前に膝立ちで座る。

「ち、違うから！もう大丈夫だから！」

「いや、でもお前顔も赤いし、少し苦しそうじゃねえか。」

「ほんと大丈夫だから！顔が赤いのは夕陽のせいだから！」

「そ、そうか。」

「だから離れて！」

「…そうですね。俺みたいなキモい奴が急に近づいたりしたら悪化しちやいますもんね…」

彼は濁った目を更に濁らせながら、こちらに聞こえないような声でブツブツと何かを言いながらカバンを手を取った。

「そんじや、もう帰るわ。今度こそ、この話はこれで終わりだからな。」
「あつ…」

そうだ。この話が終わってしまえば彼との接点はなくなってしまう。教室では話しかけるなど彼から釘を刺されているため、これから先、彼とはなんの関係もないただのクラスメイトとしてなんの絡みもなく、3年を過ごすことになるだろう。

イヤだ。

もつと彼と話したい…

もつと彼を知りたい…

「待って！」

「…？」

「えつと、その…」

「またもや話す内容がまとまっていけないにもかかわらず、呼び止めてしまった。」

えつと…そうだ！

「その…お、お詫び！そう！君には散々迷惑かけたからさ、お詫びになにかさせてよ！」

「いや、いらぬから。強いていうなら、早く帰らせて。」

「そうじゃなくて！なにかして欲しいこととかないかな？できる限りのことならなんでもするから！」

「な、なんでも…だと…」

瞬間、彼の目がすごい勢いで腐った気がした。

「え？いや、それは…ちよつと…」

「まだなにも言っていないんだけど…」

「目が全てを語ってたよ。」

「目だけで俺の考えてること全部分かっちゃうとかエスパーかよ。てか、ドン引きしながら自分の身体を腕で隠すのやめてね。通報され

ちやうから。」

「そんなことはいいからさー!」

「そんなことで片付けられちゃったよ。」

「例えばさ、す、好きなものとかないの?食べ物とかさ。」

なぜかこの質問には少し勇気がいった。そして、彼の返答に少し緊張している自分もいた。

「マツ缶。」

「へっ?」

「だから、マツ缶だ。千葉県民のソウルドリンク。」

かなり予想外の答えが返ってきた。マツ缶ってまさか…

「あの黄色い缶コーヒーの吐き気がするくらい甘いやつ?」

「よし、お前とは朝までとことん話し合う必要があるみたいだな。」

まさか、本当にあの暴力的に甘いコーヒーのことだったのか…

一度だけ、桃花のを一口もらったことがあるが、あれは衝撃的だった。あまりの甘さに一瞬、練乳を直飲みしたのかと勘違いしたほどだ。

そして、彼の冗談(?)とはいえ話し合うと聞いて少し嬉しく思ってしまった自分が情けない…

「はあ、とにかく詫びなんていらねーから。じゃあな。」

帰ってしまう!どうすれば…

黄色い缶コーヒー。そういえば昼休み彼は飲んでいたな。パンと一緒に…パン?

そういえばいつもパンのような…

そうだ!!?

「そ、それじゃあさ…明日からお弁当作ってくるよ!」

「…は?」

この時の私とはかく彼との繋がりが欲しくて必死になりすぎた結果

…完全に暴走していた。

「お昼はいつもパンだよな?」

「いや、確かにそうだけど…」

「よし！じゃあ明日から作ってくるからパンは買ったらダメだよ！」

「待て待て待て！話を勝手に「大丈夫！味も少しは自信あるし、栄養だって考えて作るからさー」あ、それはありがたい…じゃなくて！」

「明日のお昼休みは私もここに来るからその時に渡すよー！」

「おいー！」

「それじゃ、また明日！」

私は早口でまくしたてて言いたいことを言いきるとそのまま走ってこの場を去った。

後ろからは彼がまだなにか言っていたが、聞こえないフリをした。

だって、こうまで強引にいかないとまた彼に言いくるめられそうだったから…

校舎を出ると、夕陽はすでに半分ほど隠れていた。

今日の出来事を思い出そうとするが、色々とありすぎて頭の中がちやごちやしている。

しかしひとつだけ、はつきりと思い出せることがある…

それは、無意識に彼の左手に右手を伸ばしたときのあのあたたかい気持ち。

途端に自分でもわかるくらい顔が熱くなり、胸が苦しくなる。

本当になんだろ？

確か中学のときも、桃花のことを知りたい、話したいと思った。今回もたぶん、彼と友達になりたいと思っっているのだろう。

でも、この胸を締め付けられる感じはなんだろう？桃花のときはこんなになかったのに…

結局、家に帰ってからもずっと考えてみたが、初めての経験である優希に答えなど出るはずもなかった。

ちなみにその日の夜、強引に彼の弁当を作ると言い張る、必死になりすぎていた自分を思い出して、枕に顔を埋めて悶えていたのはまた別の話。

午前5時。

けたたましい目覚ましの音に叩き起こされ、二度寝したい気持ちを振り払いながらベッドからモソモソと這い出た。

寝ぼけ眼のまま洗面所に向かって冷たい水で顔を洗い、両頬を手のひらで、パチン・と叩いて無理やり眠気を吹き飛ばし、気合を入れた。「よしっ！」

今日はいつともより早く起きたのもあるが、昨日は特に寝つきが悪かったのもあり、まだ少しボーッとする。

いつもは夕飯のあと、お風呂に入って夜の日付が変わる少し前からいまで勉強をしてそのまま睡眠をとるのが流れだが、昨日は勉強道具を広げるも、全然手をつけずただ机の上でボーッとしていた。

もう今日は早く寝ようと布団に入った方がいいが、それでも頭が思考を止めてくれない。

それどころか、自分の行動を思い返してベッドの中で怒ったり喜んだり悲しんだり恥ずかしんだりと、1人で百面相を繰り広げていたため結局、寝付いたのは日付が変わってからだった。

そのことを思い出して、何やってんだ私は、と気持ちが沈みかけたが再度気合を入れなおし、台所に向かった。

彼には昨日、味には自信あると大見得切ったのはいいが、お弁当を作るのは実は人生初だったりする。まあなんとかなるだろうと軽い気持ちで考えていたが、いざ作るとなると少し不安になってきた。

あれ？

階段を降りたところで、台所の灯りがついていることに気づいた。覗き込むとそこには、この前の誕生日に渡したエプロンを身につけて料理の支度をしている笑顔の祖母がいた。

「優希、おはよう。」

「おはよう。おばあちゃん、今日から私がお弁当作るって昨日言ったのに。」

私が物心ついたときにはもう両親はいなかった。祖父も私が生ま

れる前から亡くなっている。だから小さい時は周りから可哀想だとか、寂しいだろうとか、変に気を遣われていた。

だが、これまで自分を可哀想とか、両親がいなくて寂しいと思ったことは一度もない。これも全て、私を愛情を持って育ててくれた祖母のおかげだ。本当に感謝している。

「優希が作るところを見とかなきゃって思って。あと、最初だからせめて準備だけでもね。初めて作るお弁当が失敗するのはいやでしょ？」

「むー、確かにそうだけど…」

正直、かなりホツとした。

いつもは祖母が朝早くに起きてお弁当を作ってくれている。

私も手伝おうとは思っているんだけど…

朝は弱くて…

「それに、彼にも美味しいお弁当食べてほしいでしょ♪」

「へっ!? いや、違うよーと、友達にあげるの!!?」

「あら、そうなの? てつきりいい人でもできたのかと思っちゃったわ。」

「なっーそんなんじゃない!」

おばあちゃんはいきなり何を言ってるんだ。

彼はそんなんじゃない。そう、ただのお詫びだ。彼には散々迷惑かけちゃったし、謝罪すらも受け取ってくれないから、せめてこれくらいはしないと私のプライドが許せないからであって、だからそんなんじゃない…

瞬間、彼が私を心配そうに覗き込んできたときのことを鮮明に思い出す……

「あら? 優希、顔が真っ赤よ。」

「…!」

「彼のことを思い出すのはいいけど、時間ないから早く作っちゃいましょ。」

「ち、違うって!」

「はいはい、じゃあまずは卵焼きからね。」

「うー…お願いします。」

初めて作ったお弁当はおばあちゃんの指導もあってうまく作れたと思う。というか、おばあちゃんがいなかったら卵焼きもまともに作れなかった。

今度、料理の本でも借りてこよう…

「お疲れ様。早く着替えてらっしゃい。もうそろそろ学校に行く時間じゃない?」

「ホントだ!すぐ準備してくる!」

部屋に戻って手早く準備を済ますと、先ほど作ったお弁当をカバンに詰めて出発する。

「おばあちゃんありがとね!いってきます!」

「気をつけて行ってらっしゃい。頑張つてね。」

最後の頑張つてねは、きっと勉強のことだろう…

そう、ただお弁当を渡すだけだ。

でも…あわよくばお話しとかして、少しでも仲良くなれたら…

そして、友達になれたらいいな。

少しだけ、期待に胸を膨らませながら、元気よく玄関を出た。

「夕舞さんおはよー!」

「おはよう。」

教室に着いた私は、クラスメイトと挨拶を交わしたあと自分の席についた。

直後、派手なグループが私の周りに集まった。

「優希ちゃんおはよ♪」

「うん、おはよう。」

その中のリーダー格である男子が人懐っこい笑顔で挨拶をしてきたから、私も笑顔で挨拶を返す。

「優希ちゃんさ、昨日の宿題やってきた?」

「うん。」

「お願いします!どうか見せて頂けませんか?」

「えっ?いいけど…合ってるかわかんないよ?」

「優希ちゃんならダイジョブだつてー。コイツ等より全然信用できるしー!」

「なんだよそれー、てか下心みえみえじゃん?」

「そうそう、他にも頭いいやついっぱいいるのに、ピンポイントで夕舞さんだもんな。」

「なつーうるせーよ!!?」

みんな朝から元気だなー。

苦笑いしながらカバンから昨日の宿題を取り出そうとしたのだが

…

「あれ?なんで弁当2つもあんの?」

「…!」

しまった。まさか、カバンの中を見られるとは迂闊だった。

「えー!なんでなんで!?!?」

「うそ?まじで!」

「誰にあげるのー!?!?」

そして一瞬にしてクラスに広まった。

クラスメイトたちはほぼ全員、こちらに視線を向けている。

やはり、女子がお弁当を2つ持つてくるということとはそういうことなのだと、思春期真っ盛りな高校生たちは思うだろう。

もちろん私はそれを否定する。

「違うよ。友達に作ってきたんだよ。食べてみたいって言うからその子の分も作ってきたんだ。」

「そうなの?友達つて、藤堂さん?」

「う、うん。そうだよ。」

「なんだー!てつきり彼氏とかにあげるのかと思つたー。」

「ついに彼氏ができたのかと思つちやつたじゃーん。」

「ビックリしたー。」

とりあえず桃花には後から話合わせてもらおうとして…

横目で彼の席を見ると、いつもの如くイヤホンをさして机に突っ伏していた。

よかった。なんとなく彼には聞かれなくなかったから。

なんとか騒ぎは大きくならず、そのまま最終してくれた。彼に渡すのは絶対バレないようにしようと固く誓ったところで、始業のチャイムか鳴った。

おかしい…

授業がひとつずつ終わるにつれて、私の心臓がより活発になっていく。

現在3時間目の授業が終わりを迎えて休み時間。あとひとつ授業が終われば昼休みで、そのときにあの場所で彼にお弁当を渡して食べてもらう予定だが…

彼とまた2人きりになると考えただけで顔が熱くなって、呼吸が早くなる。どうやら、私はすごく緊張しているみたいだ。

想像しただけでこれなのだ。2人きりで会ったら…

ちらと彼の席を見ると、本を真剣に読んでいた。

瞬間、心臓が更に跳ね上がる。

2人きりなんて無理だ…心臓が爆発するんじゃないか。

私は昨日裏切った親友の元へ、なるべく平静を装って向かった。

「お願い！お昼休みになにも言わず私についてきて！」

「い、いきなりどしたのさ？」

「なにも聞かないで！お弁当だけ持って一緒にきて！」

場所は人気のない屋上に続く階段。私の様子を見るなり、桃花にすぐこの場所に連れてこられた。

たぶん私が冷静ではないことをすぐ察したのだろう。さすがは桃花。

そしていきなり本題をぶつけた。理由も話そうか考えたが…緊張するから一緒にきてなんて言いたくない。

「わかった！わかったからちよつち落ち着きなつて。とりあえず優希が切羽詰まってるのは見て分かるからさ。」

「うん。」

「…りよーかい。理由は聞かないよ。とにかく一緒に行ってご飯食べ

ればいーんでしょ?」

「ありがと!ほんと助かるよ!」

「ニヒヒツ、これで貸しふたつだねー♪」

「ふたつ?なんで?」

「忘れたとは言わさんぞー!昨日あんだだけお膳立てしてあげたんだもん。これで貸しは「それは本気で言ってるのかな?」いやほんと勝手な真似してすみませんでした。」

「いや、でも結果的によかったからさ…うん、ありがとね。」

「やつぱりー!いやいや、どういたしま」でも貸しとは思わないから。ですよねー。」

そのあと、少しだけ話をしてお互いまっすぐに教室に戻った。

よし、桃花がいてくれたら少しは緊張が和らぐ…かも。

あとはお昼休みを待つのみ。よし!

私は決戦(?)に備えて、小さく拳を握って気合を入れた。

お昼休みは桃花に同行してもらうことによって少しは気が楽になったが、それでも私の鼓動が収まることはなく4時間目の授業が始まった。

先生が文法について色々と説明しているが、もちろん今の私の頭にそんな知識など入ってくるわけもなく、必死にお昼休みのことについて考えていた。

あのかきは勢いでお弁当を作ってくるって言っちゃったけど、やっぱり彼は迷惑だと思ってるか。

なんであのかき、冷静に考えなかつたんだろう。

確かに友達になりたいと思ってるけど、こんな強引な形で誘って迷惑をかけるようじゃ本末転倒だ。

「それではこの文章を…夕舞。」

それにこんな状態じゃまともに会話できる自信ないよ。

「夕舞？」

…よし、会話は桃花に全て任せよう。たまに変なこと言うからそのときは全力で止めるだけだ。

「夕舞優希！」

「は、はい！」

「どうしたのだ？君らしくない。」

「すみません…」

「ふむ、君は普段から真面目に授業に取り組んでいるからな。今回は大目に見よう。では…比企谷。」

私の心臓がまたひとつ跳ね上がる。

彼は無言で教科書を持って席を立つと、すらすらとその文章を読み上げていく。そしてその姿をボーッと見る私。

…ダメだ。最近ほんとに弛んでいる。もうすぐテストがあるんだ。しっかりしろ。

そう自分に言い聞かせて残りの時間、集中しようとするもやはりどこか上の空でいつの間にか授業が終わっていた。

「お待ちせ桃花。」

「おっし！それじゃ行こっか！」

いよいよ決戦（？）のとき。私はすぐに桃花を迎えに行き、なるべく平静を装ってあの場所へ向かう。途中、桃花から色々説明を求められるかと思っていたが、彼女は陽気に鼻歌を歌いながらただ私の後ろをついてくるだけだった。

…多分、気づかれてるんだろうな。

後ろを振り返ると彼女はニヒツと無邪気な笑顔を返してくるだけ。その全て知ってるよって笑顔に少しムツとしたけど、これから桃花にはいっぱい働いてもらう予定だから何も言わず目的地に向かう。

その間も頭の中で、彼の口に合わなかつたらどうしようとか、もう来ないでくれとか言われなかなとか、思考がネガティブな方向に偏りはじめたときには、あの場所はもう目の前だった。

ここの角を曲がれば彼がいる。一度立ち止まって深呼吸をすると、後ろから桃花が背中を優しく叩いてくれた。

うん、大丈夫だから。

覚悟を決めて角を曲がるとそこには…

パンを食べようとしている彼がいた。

「ちよつと待った!!？」

「…！」

「なんでパン買ってきてるの!?!昨日、お弁当作ってくるから買わないでって言ったのに！」

「いや、ほんとに来るとは思わなかつたし…」

「約束したのに！」

「約束ってか、お前が一方的に言ってきただけじゃん。」

「くっ…と、とにかくお弁当持ってきたからそのパンは持って帰って！」

「もう開けちゃったし。」

「じゃあお弁当食べた後に食べて。」

「そんな食えねーよ…」

「約束破った君が悪い。」

「ねえ、なんでいつも会話が一方通行なの？ いろんな意味で勝てる気がしないんだけど。」

さつきまでの様々な不安はどこにいつてしまったのか、開幕から全開だった。

その直後、後ろから大きな笑い声が校舎裏に響き渡った。

「あー…ほんと死ぬかと思った。」

「桃花は笑いすぎだから。」

「ごめーん♪」

もう。ほんと調子がいいんだから。

彼女は私の横を通り過ぎると彼の前に立って自己紹介を始めた。

「比企谷くんこんにちわー！ 昨日はありがとうね。そして、うちの優希がいつもお世話になっています♪」

「お、おう。」

桃花のいつもより数段甘い声を出してのあざとい挨拶に、心なしか彼の顔が少し赤いような気がする。

いや、甘い声にじゃなくて、中央に寄せている2つのおっきいメロニンになのかも…

というか…

「うちのつて別に私は桃花のじゃない。あと昨日つてなに？」

「あれれー？ 気になっちゃう感じなのかなー？」

「…どうせ放課後のことだよね。」

「どーだろーねー♪」

…なんだか胸がモヤモヤする。

これは桃花の物言いに対してなのか、それとも…
とりあえずこの気持ちは置いておこう。

桃花が軽い挨拶と余計なことを言ったあと、私たちは3人でベンチに腰を下ろした。

場所は自然と、左に彼。真ん中に私。右に桃花になった。

だが、3人だとやはり狭く、思ったより近い距離になってしまった。

桃花にもうちよつと端に寄ってもらおうと彼女に視線で懇願したが、返ってきたのは男子が見たら全員が落ちてしまいそうなほど可愛いらしいウインクだけ。

…気づいてるクセに。

「優希さー、そろそろお弁当渡さないの？さつきから比企谷くんがお預け状態でちよつち可哀想だよー。」

「え？あつ、うん…」

彼を横目で見ると、やはりというべきか、居心地が悪そうに視線を泳がせていた。

先ほど吹っ飛んだ緊張が蘇ってくる。

おばあちゃんが手伝ってもらったとはいえ、実際に作ったのは私なのだからやはり不安である。

もしかしたらうちの味付けが合わないかもしれない。

でも、そんなのは今更だ。私が強引に取り決めた約束なのだからいい加減、覚悟を決める。

中学のとき、勇気が出ない私に桃花が送ってくれた言葉がある。

女は度胸!!？

「こ、これー」

色々と考えていた言葉が全く出てこなかった。

…これが今の私の精一杯だった。

彼は恐る恐る、青い水玉模様の布で包んだお弁当箱を受け取る。

「お、おう。ほんとに作ってきたんだな。」

「うん…で、でも！味付けが君の家の味と違うと思うから、もし美味しくなかったら全然残してくれてもいいし…」

最後の方は小さな声でポシヨポシヨと喋ったため聞こえていないだろう。

彼は受け取ったお弁当の包みをゆつくりと解いて、お弁当のフタを開ける。

「おお…」

お弁当を見た彼は目を見開いて少し驚いている様子だった。

見た目はおばあちゃんが色々教えてくれたから大丈夫だと思う。

「食べていいか？」

「も、もちろんだよ！」

ここからが本番だ。

彼はいただきます、と手を合わすと、家庭によって味が変わる代表格であろう卵焼きを口に運ぼうとする。

が、途中で止まった。

なんで？

「…あのだ。」

「へっ？」

「そんなに見られると食べづらいんだけど…」

「ご、ごめん！というかそんなに見てないよ！」

「いや、でも身体ごと前に「早く食べて！」はい。」

「…ぷぷっ！」

どうやら気づかないうちに前のめりになっていたらしい。

今の顔を彼に見られないよう反対側に首を回す。

隣では桃花が下を向いて肩をプルプルと震わせていた。

無視しよう。

「…甘い。」

「…！」

彼の一言に首を戻してお弁当を見ると、卵焼きがひとつなくなっていた。

おばあちゃんの卵焼きは砂糖やみりんを入れてと、かなり甘めに作られている。

彼はあのとてつもなく甘いコーヒーが好きだから、卵焼きも甘いものが好きだと思ってただけだ。

違ったのかな…

「ごめん。口に合わなかったかな？」

「いや、マジですげーうまいぞー！」

瞬間、安堵と嬉しさが同時に溢れてくる。

「ほんとに!？」

「ああ。母ちゃんのよりうまいかもしれん。」

小町には負けるがな…と続けていたが、そんなの聞こえないくらい私は嬉しくて、思わず桃花に抱きつくところだった。

その後も、彼は他のおかずを口にしても本当に美味しそうに食べてくれた。

「それじゃ、私たちも食べますかー♪」

「うん！」

安心したら自分もお腹が減っていることに気づいた。

すっかり上機嫌になった私は、笑顔で卵焼きからパクついた。

「ごちそうさまでした。」

私と桃花が自分たちのお弁当を半分ほど食べたところで、彼は私の作ったお弁当を残すことなく、全て食べ終えた。

「お、お粗末さまでした。」

どうしよう…めちやくちや嬉しい。

自分の作ったものを美味しいと言って全部食べてもらえることがこんなに嬉しいなんて思っていなかった。

自然とニヤけそうになる表情を無理やり引っ込めて、平静を装った。

が、黒い尻尾を生やした親友が、私のちよつとした表情の変化を見逃さなかった。

「んー？優希ちゃん、ほっぺたの辺りがピクピクしてない？」

「……。」

「痛っ！わ、わかったから無表情で腕つねらないで！ごめんってば！」
親友のおかげでここまでこれたのはいいけど、やはり油断ならぬい。

力技で小さな悪魔を撃退したのはいいが、隣では彼が不思議そうにこつちを見ている。

そして、今の空気に若干気まずさを感じつつも彼は、お弁当箱を渡した時と中身がない以外同じ状態で返してきた。

「あー、弁当ほんとに美味かった。ありがとな。」

「よかった。口に合わなかったらどうしようかと思ってたから。」

「特に卵焼きとか、俺好みでめちやくちや美味かったぞ。」

「実は卵焼きが1番不安だったから、すごいホツとしたよ。」

「さすが、自信あるって言ってただけあるな。」

「え？あつ！もちろんだよ！」

危ない。忘れてた…

それはそうと…

彼とは何回か話したけど、いつも私が謝っているか、言い合いをし

ているかで、こうやって普通な感じの会話をするのは初めてではないか？

まるで、桃花といるときみたいに楽しい。

彼といると少し緊張する半面、落ち着いている自分もいる。

矛盾してるのはわかっている。相変わらず鼓動だつて落ち着いていない。

でも、他のクラスメイトとの会話みたいに、変に気を遣ったりしないから気持ちがよく楽しんだ。

自分でもわかる。

彼の前での私は、完全に素の私だ。

…ちよつと見栄を張ったりしたけど。

「それじゃ、そろそろ戻るわ。」

「あつ…」

彼はベンチから腰を上げると教室に帰るのか、そのまま校舎裏を後にしようとしていた。

待って。

もつとお話したい。この楽しい時間をまだ終わらせたくない。

でも、彼を引き止める理由もないし、会話も思いつかない。

でも、私はこれからお弁当を作ってくると言ったから、明日もここで会えるはず。

でも…

仕方がない。今日は諦めようと、彼の背中を見送ろうとしたが、隣の親友がそれを許さなかった。

「ちよつち待ちなつて！まだ時間あるんだから、ゆっくりしていきなさいな♪」

桃花は立ち上がると、前を通り過ぎようとする彼の手首を掴んで無理やり止めた。

「えっ？だつて俺がいたら邪魔でしょ。」

「そんなことないって。むしろもつとお話したいなーって思ってるくらいだし…優希が。」

「…わたし!?？」

いきなりのキラークラスに戸惑う私。

「そ、それはまあ、その…うん…」

「もう！はつきり言えばいいのに！」

「とにかく！君も早く座りなよ！あと、桃花は早く手を離してあげないと座れないでしょ！」

「お、おう。」

「あつ！ごめんね優希ちゃん♪」

ニヤニヤしながら手を離れた桃花と解放された彼はベンチに座りなおした。

そして桃花は私の耳元で、

「…妬いちゃった？」

「っ…!!？」

そう囁かれた私は、一気に顔が熱くなった。

「なっ…なっ！」

「冗談だよ♪」

「なあ？やつぱ俺、いらなくね？」

「あはは、ごめんごめん。こつちの話だから。」

ほんとに桃花は！

今度は私がベンチから立ち上がって逃げたくなったよ。

これ以上この小悪魔が変なこと言ったら全力でこの場所から祓ってやろうと決意した。

「比企谷くんはさー、なんでいつも一人で食べてんのー？」

私と桃花もお弁当を食べ終えて、持ってきていたお茶を飲んでいるときに桃花の唐突な質問。

その質問って結構デリケートなことなんじゃ…

「そりゃ、友達いないからな。」

「そうなの？おもしろいのに。」

「そう思っただけなのは藤堂だけだろ。まあ最初から2ヶ月間、学校にいなかったからな。」

「事故にあつたつて聞いたけど？」

「まあな。」

「そっかー。友達作り真つ盛りの時期にいなかったのは痛いねー。」

「いや、どっちにしろ友達できなかつただろ。」

「どして？」

「俺に合う奴なんかいるとは思わないし、別に欲しいとも思わないからな。」

「あはは！捻くれてるねー！」

す、すごい…

私がやつとのことで普通に会話ができるようになったのに、桃花は今日初めて会話してここまで話せるなんて…

こういうところはやつぱり尊敬できるし、同時に羨ましいとも思う。

私も桃花みたいだったら、もっとまともな出会い方をしてたのかな

…

「じゃあ優希がこの学校での友達第1号なんだねー。」

「はっ？」

「へっ？」

ちよっ、桃花!?!?

「待て。なんでそうなるんだ。」

「そ、そうだよ！いきなり過ぎるよー！」

「なんで？一緒にお昼ご飯食べてお話してき、どっからどう見ても友達でしょ。」

「でも、お互いのことなんてほとんど知らないし…」

「俺が夕舞や藤堂みたいなりア充組と合うとは思わないだけど…」

「友達なんかそんなもんだって。別にお互いのことなんかあまり知らなくたって、趣味とか性格が合わなくたってそれが友達になれないって条件にはなんないよ。ましてや2人は何回か会ってるし、話聞く限りではけっこう本音で話してるみたいだからもう完全に友達じゃない？」

「それは…」

「別に恋人になるわけじゃないんだからさー。2人とも深く考えすぎ！それとも2人は友達の過程をぶっ飛ばしていきなり恋人になりた
いのかなー？」

「なっ…!!?」

いきなりの桃花の爆弾発言にフリーズする2人。

「あれ？冗談に決まってるじゃんかー！2人とも顔真つ赤にしちやつ
てさー。まさかあ、ほんとに思ってたリ…ぐええ！」

隣の小悪魔…いや、悪魔にこれ以上しやべらせないよう、その細い
首を締め上げた。

「天国のおばあちゃんが川の向こう側から手を振ってたよ…」

「ごめん…」

赤を通り過ぎて青くなっていく親友の顔に気づいて我に返った私
は、もう恥ずかしすぎてずっと下を向いて顔を手で覆っている。

「いやー、今回は私もからかいすぎちゃったからさー。」

「怖え…」

彼は、もう何回目かわからない私であって私じゃない行動にすつか
り怯えているようだ。

「優希は普段、こんなんじゃないんだけどねー。中学から見てるけど、
こんな優希は初めてかも。」

「じゃあ俺はさつき、夕舞の本性を目の当たりにしちゃったってこと
かよ…」

「でも言い方を良くすると、素の優希が見れたってことだからねー。
私以外に見せるって激レアだよー！ラッキーだねー♪」

「殺されかけたのにラッキーとか言えるそのメンタルがすげーわ。」

「ほら優希、そろそろ顔上げなよ。」

顔をブンブン振って必死に抵抗する。

「わかった。それじゃ比企谷くん。私はそろそろ教室に戻るから優希
のことよろしくね♪」

「だ、だめー！」

「やつと顔上げたねー。」

「うー…」

今日の桃花はほんとに意地悪だ。

彼の顔がまともに見れないよ…

「よしーもうすぐお昼休みも終わりそうだし、今日はこの辺で解散としますか!」

腕時計を見ると、いつの間にかもうすぐお昼休み終了のチャイムが鳴る時間になっていた。

「それじゃ、明日は私いないからさ。2人で仲良く食べてね♪」

「待って!どうして?!?」

「えっ?明日も来んの?」

1人でなんて絶対に無理だよ!!?

「私だって付き合いってもんがありますからねー。桃花はこれから比企谷くんのお弁当作るって約束してたんでしょ?」

「そんな…」

「いや、今日だけで充分だから。夕舞も無理して作ることはないぞ。」

「違うよ!無理なんかしてないよ!ただ…」

2人きりとかどうすればいいのか分からないだけ。

「ダイジョブだって!優希は料理の練習したいから、お礼も兼ねて食べてもらって感想が欲しいんだもんね。」

「う、うん!だから…これからも私の練習に付き合ってほしいの。君なら率直な感想とか言ってくれそうだし。」

「それなら別に俺じゃなくてもよくないか?それこそ藤堂とか…」

「私は愛しのマミーが毎日、愛情を込めて作ってくれてるからねー。ほら、比企谷くんなら毎日パンみたいだし、丁度いいじゃん。」

「なら他のクラスメイト達は…」

「比企谷くん甘いなー。優希の手作り弁当がどれほどの価値があるのか知らないでしょ?男女問わず人気者の優希ちゃんが他のクラスメイトにあげたらその子が自慢してみんな欲しがっちゃうでしょ。そうなるって面倒だから、お昼休みに1人で食べてるぼっちの比企谷くんが都合いいんだよー♪」

「ぼつちのつていらなくない？確かにぼつちだけど…」

「お、お願い！感想も思ったことをそのまま言ってくれたらいいからさ。もちろん無理やり付き合わせるんだから、お弁当代なんていらない。」

彼の前に立って深々と頭を下げた。

せつかくここまで桃花がお膳立てしてくれたんだ。

私がここで頑張らないと意味がない。

彼のこともっとよく知るためにも。

しばらくの無言のあと、彼は最後まで何かに迷っているようだったが、ようやく口を開いた。

「…ひとつ、条件がある。」

「…なに？」

「弁当代だけはちゃんと払わせてくれ。いくら練習っていう名目があるとはいえ、タダだと施しを受けてるみたいで嫌だからな。」

「でも」それが駄目ならこの話は無しだ。これはおれのプライドに関わるからだからな。譲れないぞ。「…わかった。」

そう言われると、こつちもこれ以上は言えない。

桃花は満足そうに私と彼のやりとりを眺めていた。

「うんうん、話はまとまったみたいだね。それじゃ、そろそろ時間もヤバイから帰ろつか。」

桃花のひとつで私たちは荷物をまとめて校舎裏をあとにしようとした。

「夕舞。」

「へっ？」

まさか彼からいきなり呼ばれるとは思わなかったから、少し間の抜けた返事をして後ろに振り向いた。

「その…弁当、明日からよろしく頼む。」

「…う、うん。こちらこそよろしくね！」

彼の普段の捻くれぶつきらぼうな態度とは一変しての、稀に出る素直な態度に私の心臓がまたしても跳ね上がる。

びつくりするから急にこういう態度になるのはやめてほしい。今

日1日で寿命がかなり縮んだような気がするよ…

後ろでは桃花が、あれは強烈だなーとか、天然たらしかー、とかよく分からないことを言っている。

とにかく、今のこの顔は誰にもみられたくないため、私は下を向いたまま桃花の横を早足で通り過ぎて教室に戻った。

翌日のお昼休み。

クラスメイトのお昼の誘いをやんわりと断った私は、若干緊張しつつも早足で校舎裏に向かうと、すでに彼はベンチに座ってコーヒーを飲んでいた。

私の到着に気づいた彼がこっちを向き、自然と目が合う。

「こ、こんにちは」

「お、おう」

心臓の鼓動がもう一段階、早くなる。

お互いぎこちない挨拶を交わして、私は彼から1人分離れたところに腰掛けた。

よし。

今日は最初から言い合いをすることはなかった。

割と自然な形で彼の隣にも座れたと思う。

あとはお弁当を食べながら普通に会話するだけだ。

会話も昨日の夜に考えたし、ある程度のシミュレーションもしてきた。

：おかげで少し寝不足だけど。

少し構えすぎではないかと思うけど、なにせ今日は2人きり。

頼りの桃花はいくら懇願しても、今日は他の友達と食べるからと言っただけできてくれなかった。

なので、今日は私だけの力で彼と会話しなければいけないのだけれど、普段桃花以外とはあまりコミュニケーションをとらない私は、こっちから話題を振ることがほとんどない。もちろん、彼の方から話題を提供してくれることも期待できなさそうなので、やはり私から積極的に話しかけないと。

とりあえず…

「はい。今日のお弁当」

「ああ、サンキュ」

今日もおばあちゃんに手伝ってもらったから味は大丈夫だと思う

けど、やっぱり緊張するな。

彼は今日も卵焼きから箸を伸ばして口に入れる。

昨日と同じ過ちを繰り返さないよう、横目で彼の様子を伺った。

「おおー今日のもうまいぞ」

「あ、ありがと…」

…やっぱり嬉しいな。

にやけそうになる顔を引き締めて簡潔にお礼を言ったあと、私も彼と同じ内容のお弁当を広げて食べ始めた。

そして数分後…

私たちはまだ会話のひとつもないまま、お互い黙々とお弁当を食べていた。

彼の方をチラツと見ると、美味しそうにゴボウの肉巻きを食べてくれている。

確かに嬉しいのではあるが…

昨日のシミュレーションでは会話をしながら楽しくお弁当を食べ過ぎて過ごしていたではないか。

これでは1人で食べているのとなんら変わらない。

会話…何か話題を！

「…えと、おいしい？」

「おう」

…会話終了。

違う！もつと他にいろいろと考えついたはずだ！

なんだったつけ？もともと彼と共通するものがあつたからあれやこれやでこういう展開になつてたつけ。

あつ…思い出した！

「そういえばさ、君はいつも休み時間に本を読んでるけど、本が好きなの？」

「んっ？ああ、本は好きだな。休日とかも基本的に本を読んでるな」

「ほんと！私と一緒にだ!!？」

「お、おう。わかつたから、ち、ちけーよ」

「あつ…ぶ、ぶごめん」

昨日もそうだが、どうも私は感情が昂ると、人との物理的な意味での距離感が曖昧になる傾向にあるらしい。

おかげで少しは落ち着いたと思われた私の心がまた熱を帯びていく。

せっかく共通の話題を見つけたのに、またもや沈黙。

私はお弁当のサケをお箸でほぐしながら気まずい沈黙に耐えていた。

「夕舞はさ…」

「へっ?」

と、彼が急に私の名前を呼ぶものだから、突然のことに対応することができず、なんとも間抜けな返事をしてしまった。

「さつき一緒に言ったけど、お前も読書好きなのか?」

…まさか、彼から話を振ってくれるとは思わなかった。

昨日のシミュレーションでも、彼から話しかけてくるパターンは想定していなかった。

絶対に無いときえ思っていた程だ。

驚いて横を向くと、彼は少しだけ耳を赤くしながら一生懸命、お箸でサケをばらばらにしていた。

もしかして…

私の近い距離感に迷惑がってる訳じゃなくて、本当は照れている? だとしたら、私だけじゃないんだって思うと、少し嬉しいかも。

あと、話しくそうにしている私を気遣って話題を振ってくれたって考えるのは、少し自惚れすぎかな?

それにしても、お互い顔を赤くさせながらサケを一心不乱にばらばらにしているって…

「クスッ」

「…なんだよ」

「ううん、なんでもないよ」

「女子になんの脈絡もなく笑われたら、男子ってすげー気になるからね。その日から三日三晩、心当たりとかいろいろ考えちゃったりして

眠れないくらいだぞ」

「読書は小さい頃から大好きだよ」

「盛大にスルーされちゃったよ。泣いちゃうよ、おれ」

そのあと、お互い照れがなくなって緊張がほぐれてからは、本のこ
とについていろいろな話をした。

いつから本が好きになったか。

初めて読んだ本はなんだったか。

好きな作家は誰なのか。

オススメの本は。

読んだことがある本や知ってる作家が被ってたら、それだけで私の
心は大きく弾んだ。

「そういえば…」

「なんだ？」

「この前、私が君の机から勝手に持っていった本なんだけどさ、続きつ
てあるの？」

「まさか…読んだのか？」

「うん。勝手にながら、全部。」

たまに書店で見かけるライトノベルと呼ばれる本は、今まで読んだ
ことのないジャンルだったから、本好きの私としては少し興味があつ
た。

そして、彼の本を読んでいると胸が熱くなる展開が多くあって、な
かなか面白かったから続きがあつたら読んでみたいと思っていたの
だ。

が、隣ではなぜか彼がうずくまって頭を抱えている。

「えっと…どうしたの？」

「よりによってあの本を見られた挙句、全部読んじゃうなんて…」

「で、でも面白かったよ」

「中の挿絵も見たんだろ？」

「それは、まあ…うん」

「まさか高校でも黒歴史を作っちゃうなんて…」

そう言つて彼は大きなため息を吐いた。

内容は主人公が敵国から自分の国を守るために戦う単純なストーリーなのだが…

たまに、ヒロインの…その…胸やお尻を不慮の事故で触ってしまうことがあつて、そのときの様子が絵で描写されている。

あれには少し驚いたけど、内容は純粋に面白いと思つたのだ。

「ほら、ワクワクしたりドキドキするシーンとか結構あつて私は楽しめたよ!」

「…主人公が木の根に引つかかつてヒロインに倒れこん」

「そこじゃない!!?」

確かにいろんな意味でドキドキしたけど。

今度、私のことをどんな人だと思つているのか、問い質す必要があるみたいだ。

「とにかく!続きがあつたら貸してもらえないかな?」

「…分かつた。明日にでも袋に入れて持つてくるわ」

「ありがとう!でも、できれば来週のテストが終わつてからの方がいいかな。あつたら読んじやうし」

「了解した」

彼から続きを借りるのは昨日の夜から決めていたが、いざ言うとなると何気に勇気がいった。

そして、彼の物を借りる…なぜかそれだけで少し緊張してしまう私が出た。

と、彼は携帯を見て時間を確認すると、お弁当を包み始めた。

「もう昼休みが終わるな」

「えっ?うそ、もうこんな時間」

「弁当、ご馳走さん」

「あつ、うん」

「…?」

私の体感時間ではまだ5分くらいしか経っていないのに、腕時計を見るともう20分近く経っていた。

今日は金曜日だから、次に彼とお話できるのは3日後である。

自分でもびっくりするくらい落ち込んでいる声で返事をしていた。

「来週だけど、テスト終わったらさ…」

「うん」

「夕舞のオススメの本、貸してくれないか？」

「…！もちろんだよ!!？」

さっきまでの落ち込んでいた私は彼の言葉でどこかへ吹っ飛んで、今は自分のオススメの本を読んでもらえる嬉しさでいっぱいだ。

私ってほんと単純だなー。

「それじゃ来週のテスト明けによろしく頼む」

「うん！」

「それじゃ俺は先に戻ってるぞ。今日も弁当ありがとな」

私に空の弁当箱を渡すと、ベンチから腰を上げてそのまま教室に戻っていった。

それにしても…

最近の私は本当におかしい。今まで、こんなにも感情を表に出すことがあっただろうか？

桃花と話すときですらこんなことはなかった。

それにこの感情は…

…やめよう。

これ以上考えても多分私一人じゃ答えは出ないだろう。

もうすぐテストだ。こんな浮ついた気持ちじゃ結果は散々になるだろう。

今はこの気持ちを置いて、テストに集中しよう。

誰もいなくなったこの場で一人、気合を入れて校舎裏を後にした。

帰宅したあとは夕飯を手早く済ませてすぐにお風呂に入ると、早速来週のテストに向けて机に向かった。

私は小さい頃から、なにかひとつの事に集中することが得意だ。勉強や読書も一度始めたら眠くなるまでずっと集中していられる。そのせいで他のことがおざなりになってしまふことが多々あり、祖母の呼びかけや友人からのメールに全く気づかないこともある。

これだけはどうしても直らない、私の悪い癖だ。

今回もいつもの如く、集中して勉強しようと教科書やノートを机の上に広げるが…

集中できない。

なら無理やりでも始めようと、ペンを持って教科書の一部分をノートに書き込もうとするが、違うことが頭を支配しているため、ただノートに写しているだけで頭に全く入ってこない。

「…よし」

それならばと、一度頭の中をからっぽにするため、目を閉じて雑念を取り払うことにした。

「……………」

…そういえば、次のお弁当の内容はどうしよう。

やっぱり男の子だからお肉は多めのほうがいいかな。

でも、いつも多めに入れてるからたまにはヘルシーなお弁当もいいかも。

卵焼きは毎日入れる予定だけど、さすがに飽きてくるかな？

あつ、今度はサンドイッチに挑戦しようかな。

でもそれだと栄養バランスが…

「…………ハッ！」

気づけば頭の中はお弁当のことでいっぱいになっていた。

そしてなかなか埋まらなかったノートには、お弁当のおかずの名前で埋め尽くされている。

「…………今日は寝よう。」

ダメだ。

今日は多分、何をやっても集中できないだろう。

そのままベッドの中に潜り込んでゆっくりと目を閉じる。

瞬間、お互い頬を染めながらお弁当を食べているあのシーンが蘇る。

「くっくっく！」

誰かに見られているわけでもないのに、布団を勢いよく頭の天辺まで引き寄せて顔を隠した。

結局、眠りについたのは日付けが変わってからで、翌日からはモヤモヤしながらもテスト勉強に集中した。

月曜日、お弁当を2つかバンに入れて家を出た私は、眠たい目を擦りながら通学路を歩いた。

昨夜は遅くまで勉強しすぎた。

せめてあと1時間は眠ればよかったなど、アクビを噛み殺しながらトボトボ歩いていると、突然背後から肩を叩かれた。

桃花かな？と思って振り返ると、

「優希、おはよー！」

そこには朝から爽やかスマイル全開の伊藤くんが立っていた。

「伊藤くん、おはよう。」

「えー、そこは名前で挨拶してほしかったなあ。」

朝の弱い私は頭がうまく働かなくて、あははッ、と乾いた笑いしか返すことができない。

∴そもそも下の名前を知らない。

そういえば、最近の伊藤くんはさっきの様に私の肩を軽く叩いてきたり、下の名前で呼んだりするようになった。

おかげで周りからは、本当は付き合っているのではないか、などとあらぬ噂が立っている。

「優希は土日、なにして過ごしてたの？」

「ずっと勉強してたよ。」

「さすがは優等生だね。僕なんか部活仲間と一緒にファミレスで勉強

しようってなったんだけど喋ってばかりで全然勉強にならなかったよ。」

その後も、学校に着くまで彼はひたすらに喋り続けて、眠たい私は適当な相槌を打っただけ。

そして、学校に近づくにつれて他の生徒も多くなり、私たちを見ると、やつぱり：とか、本当だったんだ：等々、みんな口々に好き勝手なことばかり言っている。

ああ、また面倒なことになるかな。

ため息を吐きたくなる気持ちを抑えて校舎に入ると、そこには下駄箱で靴を履き替える彼の姿があった。

「…ッー」

驚いた私は一瞬だけ立ち止まると、さつきまでと違う私の様子に気づいたのか、伊藤くんが私の顔を覗き込んできた。

「どうしたの？」

伊藤くんと私の近い距離に周りざわめき立つと、彼も自然とこちらに視線を向けた。

：やだ。見ないで。

他の人に誤解されるのは別にいい。だけど…

彼に誤解されるのだけは、絶対に嫌だ!!?

「なんでもないから！私、教室行くね!!？」

そう言い残すと、急いで上履きに履き替えて早足で教室に向かう。

彼とすれ違いざまにどんな反応をしているのか確認しようかと思っただが、何故か怖くて見る事ができず、ただ下を向いて通り過ぎるしかなかった。

伊藤くんは後ろから大きな声で、また後で！と叫んでいるが、これ以上、誤解を招くようなことはやめて！と叫び返したくなる気持ちを堪えてその場から逃げ出した。

昼休み、今日も桃花は別の友達と食べるということで1人、カバンを持って校舎裏に向かった。

「こんにちは。」

「うす。」

私の挨拶に気づいた彼はこちらに顔を向け、そのまま数秒固まった。

「…なに？」

「いや、なんかやたら疲れてないか？」

「…気のせいだよ。」

実際は気のせいではないのだが…

朝の出来事から今に至るまで、終わりのない質問という名の拷問を受けた私は確かに疲れきっていた。

クラスメイトや、何故か話したことのない別のクラスの子たちからのほとんど同じような質問の繰り返し。

これに関しては、私の中である種の慣れが生まれていたため、あまり疲労は感じなかった。

では、何故ここまで疲れているかという点、クラスメイトたちからの質問に対していつもの2倍近い声量で答えていたからだ。

といっても、普段の声量が他の人と比べて小さいため、周りにはあまり気になっていないようだったが、これにはもちろん理由がある。

理由は単純。少し離れた席で突っ伏している彼に聞こえるようにするためだ。

…我ながらバカなことしてるなあ、と何度も思ったが、それでも彼に誤解されるよりはマシだと思ったのだ。

彼は私の様子に疑問符を浮かべながらも、あまり気にした様子もなく私からお弁当をお礼を言いながら受け取った。

「そういえば…」

「…？」

お弁当を広げて食べ始めようとするところで、彼が突然何かを思い出したように動きを止めて言葉をかけてきた。

「えっと、その…いいののか？」

「…なにが？」

何か言いにくそうに口をもごもごとさせていたが、なんとなく彼が

何を言わんとしているか察しがついてしまった。

「だから、こうやって俺なんかと弁当食ってるのがさ。」

「…もしかして、今朝の事を言ってる?」

「そうだ。彼氏がいるのに俺とべんと」

「彼氏じゃない!!?」

「…!」

自分でも驚くほど怒気の含んだ大きい声で彼の言葉を遮っていた。

そのことにハッと気づいた私は、一度心を落ち着かせてから彼に向きなおる。

「…いきなり大声出してごめんさい。とにかく、あの噂は全くのデマで、伊藤くんとは全然そんな関係じゃないから。」

「お、おう。こつちこそ、何も知らないのに適当なこと言ってますまんな。」

私の謝罪と否定の言葉に、彼も謝罪で返してくる。

どうやら、私は彼に勘違いされていたことが思ってた以上にシヨックで動揺してしまったようだ。

だが、彼は私と伊藤くんとのやりとりを実際に見て、更に周りが付き合ってるだのなんだの囃し立てているのだから、勘違いするのも無理はない。

そんな彼に怒鳴り上げた私はなんて心が狭い人間なんだろう。

感情を制御する事は難しいことなんだと改めて知った。

それにしても…

私の昼休みまでの努力は一体どこへ…

ひとまず解ってもらったみたいだし、この話題は話していてあまり気分の良い話ではない。話題を変えよう。

「えっと…そういえば、明日からテストだけど、勉強してる?」

自分でも下手くそな話題の逸らし方だとは思ったが、彼も氣遣ってくれたのか、この話題にのっけてくれる。

「あー、まあぼちぼち。」

「そっか。高校に入学してから授業のレベルがグッと上がってテスト

範囲も広がったから、私は家で必死に勉強してるよ。」

「真面目だな。」

「そんなことないよ。たまに途中から本を読んだるときだってあるし、桃花と電話してるときだってあるよ。」

「そうか。」

「あつ、他にも…」

私は話題を途切れさせないように、頭をフル回転させて話しかけ、彼はそれを端的に答える。

途中から、この展開にデジャヴを感じたが、それが私と伊藤くんと
のやりとりだという事だと気づくのにそう時間はかからなかった。

伊藤くんも私と話するとき、こんな感じだったのかな。

「あの、ゴメンね。なんか私ばかり一方的に話して。」

「いや、むしろそっちのが助かる。普段、会話をする事なんか妹くらいしかいないからな。会話が全く思いつかん。」

「あはは…なら良かった。そしてなんかゴメン…」

「そこで謝られたら余計悲しくなっちゃうから。」

彼の悲しいお話はとりあえず置いて、これから伊藤くんと話するとき…いや、クラスメイトたちと話ときは、どんな内容でもちゃんと耳を傾けることにしようと思っただけ。

「そういえば明日から3日間は午前中のテストで終わりだから、お弁当は作らないけどいい？」

「いいもなにも、むしろ今日で終わりでもいいくらいだぞ。」

「そ、それはだめ！」

「いや、だって夕舞が料理上手いってことはもうわかったんだから、もう充分だろ。」

「私1人だとまだ上手く作れないから、せめて1人で作れるようになるまで付き合って！」

「は？1人？」

「うん！1人で…あつ。」

やってしまった。

必死のあまり、見栄を張っていたことをすっかり忘れていた。

「と、とにかく！もうしばらく付き合ってもらおうから！それじゃ、次は金曜日！！？」

恥ずかしさで爆発しそうになりながら、彼から空のお弁当箱をひったくると、そのまま乱暴にカバンに突っ込んで逃げるように校舎裏を後にした。

1 人校舎裏に残された彼は唾然としながらも、ベンチに座ったまま合掌した。

「…(´▽`)ちそうさまでした。」

翌日からは、3日間に分けてテストが行われた。

1日目と2日目は3教科、3日目は4教科で全て午前中に終了し、午後はフリーになる。

今回、テスト勉強があまり身に入ってなかったため少し不安に思っていたが、どのテストの内容も難しいと思うところはなく、特に数学は元々得意だったということもあり、会心の出来だった。

ただ気掛かりな事があるとすれば、この3日間、彼とお弁当を食べる時間がなかったため、全く話す機会がなかったことである。

もちろん教室では顔を合わせているが、人前での接触はやめてくれと彼から釘を刺されているため、話しかけることはできない。

それに、多分だけ教室では避けられてる。

彼とは何度か目が合ったが、すぐに逸らされたりもした。

これには流石にショックだった。

いくら彼が目立ちたくないとはいえ、何度か一緒にお弁当を食べた仲だというのに目線すら合わせてくれないとは…

やはり、本当は1人で食べたかったのに私が無理やりこの関係を続けたからだろうか。

それとも、私がかくごらない見栄を張ったことがバレたからだろうか。

せつかくテストも終わって、もうすぐ夏休みだというのにこの調子では気が滅入る。

明日の昼休みには会話する機会は十分あるのだから、そのときに尋ねてみるべきか。

いや、もしかしたらもう来ないでくれと拒絶されるかもしれない。

やっぱり、嫌われたのかな…

ヤバイ…頭が痛い。

それに、呼吸も苦しくなってきた。

もしかしたら、また発作が起こるかもしれない。

急いで帰り支度を済ませると、クラスメイトからのテストの打ち上

げの誘いを体調が悪いと言って断り、ふらつきながらもなんとか家まで帰った。

その夜、やはりというか、高熱に見舞われた私は翌日の学校を休んだ。

「オーツス！調子はどう？」

「もう全然平気。いつも通りだよ。」

「そりや良かった。ほい、一緒に食べよーぜ♪」

「ありがとう！お茶入れるね♪」

金曜日は丸一日睡眠をとり、その翌日にはすっかり元気になった私は図書館に本を借りに行こうと支度していたのだが、おばあちゃんにまだ安静にしてなさいと止められ、ヒマな私の元に桃花が遊びに来てくれた。

「桃花はテストどうだったの？」

「…ボチボチダヨ。」

「…結構ヤバいの？」

「そうなんだよー！特に数学がヤバすぎる！」

「そうなの？むしろ簡単だったと思うんだけど。」

「嘘だッ！あんなの20点取れたらいい方だよ！」

「…ほんとよくこの高校受かったね。」

桃花は中学のときからとにかく勉強が嫌いだった。

成績も散々でこのままだと高校にいけないとまで言われ、追い込まれた桃花は高校受験まで死に物狂いで勉強した。

もちろん私も散々付き合わされたが…

だが、おかげで同じ高校に入れたのだから今となってはいい思い出だ。

「うわーん!!？夏休みの補習がほぼ確定じゃんよー！優希ちゃん助けてー!!」

「うん、頑張ってるね。」

「…ねーえー、このままだと桃花ちゃん補習で何回テストやっても受かんないからさー。お・し・え」

「うん、頑張つてね。」

「ハクジョーもの！おにーあくまー！」

「自業自得だよ。桃花は集中してやれば出来るんだから頑張りなさい。」

「さようなら、私のエンジョイサマーライフ…」

真っ白な灰になった桃花を無視して買ってきてくれた大好物のどら焼きを頬張る。

やっぱりここのは餡子がぎっしり詰まってるおいしい♪

「あつ、そういえば比企谷くんとはもう付き合ったの？」

「…!？」

危うく口の中いっぱい詰めたどら焼きを盛大に吹き出すところだった。

昆布茶で無理やり流し込んで呼吸を整える。

「フーツ…いきなりなにありえないこと言ってるの!？」

「えー、まだなんだー。」

「まだというか、そんな…付き合うなんて…考えたこともないよ。」

「そうなん？」

「だって、彼と話すようになってまだ日も浅いし、まだお互いのことなんて全然知らないし、それに…」

「それに？」

「彼は私のことなんて見向きもしてないだろうし…」

このテスト期間中、彼に避けられていることを桃花に話した。

話している最中、彼から避けられているという事実を再認識して、また心が沈みこむ。

「なるほどねー。要するに優希は比企谷君から嫌われたんじゃないかってことね。」

「…うん。」

これまでのことを考えると当たり前か。

彼の本を勝手に持って帰ったり、強引に昼休みを一緒に過ごした

り、むしろここまで付き合ってくれた彼は本当に優しい人だ。

たぶん私が謝っても、彼はまたお得意の捻くれた優しい答えを返してくれるだけだ。

もう、私の我儘に付き合わせられない。

「これ以上、彼の優しさに甘えるのはやめる。」

「てことはさ、比企谷くんとは関わり合う前の関係に戻るってことでいいのかな?」

「…そうだよ。」

「ふーん。ほんとにそれでいいの?」

「だって、これ以上は彼の迷惑にしなければならないし…」

「迷惑?」

「元はと言えば、私が勝手なことしたばっかりに余計な心配させたり、お弁当だって本当は1人で食べたいのに私が無理やり作ってきて一緒に食べてるんだしさ。嫌われるのは当然だよ…だから、もう」

「優希ってさー」

突然、桃花が私の言葉を遮ってきた。

先ほどまで明るい口調で話していた桃花の声が急に低く、冷たい声になる。

「さすがにそこまでだともうさ、愚かでしかないよね。」

「なツ…」

この無表情で冷たい感じ…

知っている。桃花が本気で怒ったときだ。

驚いてなにも言えなくなつた私に構わず桃花は言葉を続ける。

「優希の他人を思いやれるその優しさは美点だよ。でもさ、今回みたいに深読みしすぎて間違つた結論を勝手に出して自己完結させるのは優しさでもなんでもない。比企谷君をバカにしてる。」

桃花の容赦ない言葉に呆然としていたが、すぐさま我に返って反撃する。

「そんなことない!これまで私の我儘でずっと彼を振り回してる!」

「迷惑って言った?」

「えっ?」

「比企谷くんは優希に1人で食べたいから来られるのは迷惑だって言った?」

「それは…」

「あのとき優希のお弁当、喜んで食べてくれなかった?」

「…美味しいって言って全部食べてくれた。」

あのかきは本当に幸せそうな顔で食べてくれたな…

「比企谷くんは別れ際になんて言った?」

「…明日からよろしく頼むって言ってくれた。」

たぶん勇気をだして照れながら言ってくれた…

「比企谷くんはそれらを言ってるとき、全部ウソに見えた?」

「…見えなかった。」

…そうだ。

私は彼のことをなに一つ見ていなかった。

自分で勝手に他人を評価してそこで終わらせるなんて、そんなの私が一番嫌っていたことではないか。

結局、私はこれ以上彼に嫌われたくないから逃げようとしていただけだ。

中学のときとなに一つ変わらない、弱虫な私。

そして、いつの間にか無表情な桃花はいなくなっ、いつもの笑顔がよく似合う桃花に戻っていた。

「分かったみたいだねー。優希がどんなにバカなこと考えていたか。」

「…うん。」

私は本当にバカだ。

「でも、教室で避けられてるのはたぶん気のせいじゃないと思うんだけど…」

「あー、それね。」

「なんか知ってるの!?!」

「まあ…知ってるけど」

「教えてください!お願いします!!?」

もうここまで桃花に色々晒してるんだ。

なりふり構ってられない。

「んー、比企谷くんには私が言ったってこと、内緒にしといてね。」
「もちろん！」

「比企谷くんはね、クラスのはみ出し者が人気者の優希と話してるところを他の人に見られたら優希に迷惑かかっちゃうんじゃないかって思ってるんだよ。」

「そんなことないよ！全然迷惑じゃない!!？」

「まあ比企谷くんの目立ちたくないってのもウソじゃないとは思うんだけどね。それに、彼の言うとおりの悶着はあるだろうし。中学を思い出してみなよ。」

「あっ…」

「でしょ。優希も何かあるだろうけど、たぶん比企谷くんのが被害は大きくなるだろうしね。」

「そっか…」

「ほんと、美少女過ぎるのも考えものだねー♪」

「茶化さないですよ。桃花だってこういうのあるですよ。」

「私はそこんとこ上手くやってっからねー。」

「…たしかに。」

言われてみれば桃花には一度もそういった話を聞いたことがない。

ともあれ…

「桃花…」

「んっ?」

「ありがとう。また助けられちゃったね。」

「助けられたなんて大袈裟だよー。ただちよつと比企谷くんが可哀想に思っただけだから。」

「また間違えるところだった。」

「ソフー、これからは先生と呼んでくれたまえ♪」

「はい！先生♪」

本当に尊敬してる、私の大親友。

ただ、怒らすとめちやくちや怖いということを改めて知った。

あれ?そういえば…

「なんで彼が私を避けてる理由を桃花が知ってるの?」

「…ん？」

「知ってるってことは直接聞いたってことだよね？」

「んー、まあ…そういうことだね。」

「いつ聞いたの？」

「…金曜の昼休みにちよつちね。」

「…えっ？じゃあ2人で」

「さーつてと！優希も元気そうでよかった。んじやまた月曜にねー」
♪

「あつ！ちよつと待って！聞きたいことはまだ」

「お邪魔しましたー!!？」

私の制止を振り切ってあつという間に出て行ってしまった。

彼と桃花が2人きり？

そんな…

他にも何か話したってこと？どんなことを？まさか桃花は彼のこ
とを？

今日もまた眠れない夜になりそうだった。

「さすがにまだ言えないねー。比企谷くんが優希を避けてた本当の理由が、目が合っただけでなぜか緊張しちゃうからってことは。」